

Therī-Gāthā

「テーリー・ガーター」に聴く
ブッダのことば

江原 通子



日本テーラワーダ仏教協会



Namo tassa
bhagavato arahato
sammā sambuddhassa

阿羅漢であり
正自覺者であり 福運に満ちた
世尊に
礼拝したてまつる

目 次

	Alubomulle Sumanasara大長老	"ツタ一長老尼	バドラー長老尼	(もう一人の) ティツサー長老尼	マハー・パジャーパティー・ゴータミー長老尼	ケーマー長老尼	グツター長老尼	イシダーシー長老尼	アンバパーリー長老尼	ダンマディンナー長老尼	パンニカー長老尼	バッダー・カピラーニー長老尼									
(まえがき)	6																				
(1) 友を悦べ	8	(2) 善行をよろこべ	14	(3) 一瞬のそれをも逃すな	20	(4) 母の至福	26	(5) 美貌の皇后	32	(6) 心にこころ許すな	38	(7) 前世といふもの	44	(8) 真実を語る人	50	(9) 悪の清め	56	(10) 向上の人	62	(11) 夫婦のえにし	68

(12)	うるわしのナンダー	(二人の) ナンダー長老尼	74
(13)	だから私は好きなのです	ロービニー長老尼	80
(14)	不死の鼓	チャーバー長老尼	88
(15)	安穏の道	ウッバラヴァンナー長老尼	94
(16)	灯の消えた時	バター・チャーラー長老尼	100
(17)	芥子つぶの真実	キサー・ゴータミー長老尼	106
(18)	老いの日に	ソーナー長老尼	112
(19)	いとしのジーヴァー	ウツビリー長老尼	118
(20)	来よ、バッダー	(もとニガントの徒の) バッダー長老尼	124
(21)	二人のスジヤーター	スジヤーター長老尼	130
(22)	二人のウツタラー	おちびのウツタラー・もう一人のウツタラー	138
(23)	萎れぬ花	ヴィサーカー夫人	144
(24)	大いなる章	スマーダー長老尼	150

テーラワーダ仏教文化の国々では父母は尊敬されます。我々は子供のとき、このように言われて育てられました。「父母は三宝の次に尊敬するべきです」と。そこまでやっているか否かは別として、親を尊敬すること、親に心配させないで生きること、親の躰を生涯守るという伝統は、いまも確かにあります。

関係のないことを書いたのは、私は江原通子様を見るたびに「お母様」だと感じてやまないからです。僧侶として中年期も通過しましたが、江原様の生き方、仏教に対する理解、語るときのインパクトの強さには感動せずにいられないのです。我が子を限りない慈しみで心配してアドバイスをすること自分の母親を思い出してください。母に語られる金言だと思つて読むべきなのは、このテキストです。正直なところ、自分は前書きを書けるほどの者ではないと思いますが、「テーりー・ガーターに聴くブッダのことば」にこのような形ででも参加できたことは光

榮に値するものです。

僧侶であろうが一般の方であろうが、江原様は、力強く、否定できないように、わがままを言えないよう、慈しみにあふれながらも厳しく語る方なのです。テリー・ガーターを参照して語られているこのテキストを読み、私にも「もつと真剣にがんばらなくてはならない」という気持ちがうまれてきました。

読者の皆様の目前には、釈尊在世当時の女性の方々が出家して、並々ならぬ努力をして最高たる幸福である解脱に達したその姿が、そのまま現れてくるに違いありません。解脱に達した方々の心境、心構えをありのままに理解して、お書きになつたこのテキストは、きっと皆様方に仏教を理解するための信頼できる書物になると確信しています。

三宝のご加護がありますように。

Alubomulle Sumanasara



1. 友を悦べ

Saddhāya pabbajitvāna Mitte
mittaratā bhava
bhāvehi kusale dhamme
yogakkhemassa pattiya. (8)

Mittā

ミッター長老尼

浄信出家のミッターよ
友を悦ぶ者となれ
安らな定に至るため
多くの教えを学べかし (8)

釈尊の生なまの教えとしてこの只一つの詩を残したミッター長老尼は、釈尊の生家カピラ城の女官で、釈尊の育ての母上、マハー・パジャーパティー・ゴータミーが、釈尊の許しを得てはじめての尼僧となつた時、共に尼さまになりました。

ですから、ここどころは、「信心によつて」とか、「信仰心で」出家したといえれば解りやすいのですが、実は「何か有り難いものにすがつて」とか、「何かを崇め頼んで」とかいう後代の「信じ求める出家」とちがい、最初期の仏教では、釈尊の教えをよく聞き、正しく理解し、この上は実践よりないと決意した個人の、まじり気ない信念の出家でしたから、そこをはつきりさせたくて、敢えて「淨信」という言葉を選びました。そこを最初にはつきりとおさえておきたかったのです。

では、お釈迦さまは一体、どのような友を持てと説かれたのでしょうか。或る時、比丘たちを集めてこんなふうにおっしゃつたと言います。

比丘たちよ、あなた方は日が昇ろうとする時、
先ず空が明るむのを知つてゐるであろう。

それは日の昇るきざしであり、先駆である。

そのように比丘たちよ、もし善き友を持つたならば、
それはあなた方が修行を成就するきざしであり、
先駆である。

と。また、お侍者のアーナンダ尊者が

「よき友を持つことは、修行を半ば成就することになりましょうか
と、うかがつた時

「アーナンダよ、そのように考えてはいけない。よき友を持つということ、そ
れは修行のすべてである」
と、応えられたといいます。

このように大切な友との交わりに、「心の成長に役立たない」と、ブッダが制
せられた話題があります。

国王論 盗賊論 大臣論 軍隊論 惡畏論 戰爭論 食物論 飲料論 衣服
論 花環論 親戚論 乘物論 村落論 町論 都市論 國土論 婦人論 英
雄論 道端論 井戸端論 先祖論 雜談 世界起源論 海洋論 あつたとか
なかつたの論

これに対し、「心の成長に役立つ」と、ブツダが勧められた話題

小欲論 知足論 遠離論 不交際論 精進努力論 戒論 檀定論 智慧論
解脱論 解脱知見論

早島鏡正『空の大経』（講談社学術文庫）

我が身にひき当てながら、この表を時々じっと眺めていると、いろいろなことがわかつて来るかも知れません。

実は、『テーリー・ガーター』は古いパーリ語で残されていますが、パーリ語では友達のことをmitta（ミッタ）と言い、女性形はmittā（ミッター）になります。つまりミッター長老尼は、日本流に碎けて言えば友子さんです。そこで釈尊

は、数々の教えの中から彼女の為のただ一つをとり上げて、「友子さん、友達を大切に、しっかり修行なさい」と、声をかけて下さったのでした。ミッター尼にとつては、それですべてが終ったのです。

この底知れぬ優しさ、明晰な指導力、日々感嘆あるのみです。

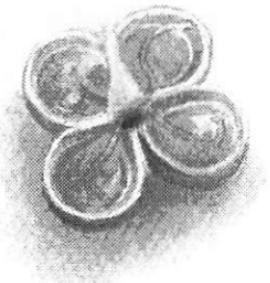
ところで、歌舞伎の「切られ与三」の舞台に、

「死んだと思つたお富さん、まめで居ようたあ、お釈迦さまでも気がつくめえ」という科白せりふがあつて唄にもうたわれました。私は幼い頃、五代目羽左衛門の魅惑的な口跡こうせきで、実際にこの名科白を聞いた覚えがあります。もう八十年近くも前のことになりますが、その時、

「お釈迦さまは世の中のことが何でもお解りになる智慧者でいらっしゃるのだ。」と祖母に聞かされ、羽左衛門の澄み透つた口跡こうせきと共に、子供心に深く感銘したことを覚えて います。

その頃の大人は、芝居見物の合間にも、心の子育てを忘れなかつたように思ひます。

1. 友を悦べ





2. 善行をよろこべ

Saddhāya pabbajitvāna Bhadre
bhadraratā bhava
bhāvehi kusale dhamme
yogakkhemam anuttaram. (9)

Bhadrā

淨信出家のバドラーよ
善行悦^{よろこ}ぶ者となれ
無上の定を得るために
多くの教えを学べかし（9）

バドラー長老尼

釈尊のことばをそのままこの偈として遺したのは、バドラー長老尼だといわれます。

パーリ語でバドラは善行、バドラーはその女性形ですから、あえて言つてみれば「良枝さん、良い行いを悦び励んで、しつかり修行しなさい」

と、相手の名前を詠みこんだ教えの詩で、釈尊は無上の宝を手渡されたことになるのでしよう。或は釈尊から励ましの一句をいただいて、唯ひたすら「^{バドラ}善行、^{バドラ}善行」と励んだ一人の尼僧さんが、いつの間にか「バドラーさん」と皆から呼ばれるようになつたのかも知れません。

ここで言われている

「無上の禅定の安らぎ」

とは、仏教徒の誰しもが目指す究極の境地、涅槃ねはんを指し

「多くの優れた教えを学ぶ」

とは、今の学校のように机を並べて先生の講義を聴くということではなくて、折にふれ、時に応じて釈尊が示し説かれた修行の道程を、一人一人が独立独

歩、それぞれ少しも息を抜くことなく日夜に実践し、具体的に体得して行くことを意味します。

バドラーも、この一句に賭けて修行に専念し、やがてバドラー長老尼となつたのです。

余談ながら、バドラーという言葉には善行の他に、賢い、吉祥、輝く、幸ある等、ありとあらゆる目出度い意味があつて、普賢菩薩も原語はサマンタバドラー。サンタは普く、バドラは賢いですから、つまり普賢菩薩ということになります。釈迦三尊の脇士として六牙の象に騎る姿であらわされることが多いのですが、日本人には馴染み深い言葉ですので、脇道ながらご紹介します。

さて、今回の主人公のバドラー長老尼は、前出のミッター長老尼と同じく、釈迦族のクシャトリヤ（王侯・武士階級）の生れで、カピラ城に仕えた宮女であり、釈尊の育ての母君マハー・パジャーパティー・ゴータミーが、仏教尼僧の第一号として出家した時、それに従つて出家した女性のうちの一人だと伝えられますか

ら、釈尊にとつては比較的身近な存在だったと言えるかも知れません。その人の名を詠みこんだ（と思われる）即興の四行詩で教えの要かなめを手渡して下さったのも、或いはそうした事情が組み込まれているのでしょう。

釈尊はよく、はじめて逢われたような若い女性には、

「妹よ」

と、やさしく呼びかけておられたようです。

先ほどゴータミー長老尼を仏教教団の尼僧第一号と呼びましたが、実は彼女は、おそらく世界の尼僧第一号なのです。何故ならば、イエスキリストの誕生は釈尊より約五〇〇年おそらく、マホメットの出現は、更にそれより約六〇〇年あとになります。又、キリスト教より古いユダヤ教にも尼僧の存在は知られず、ギリシャの神殿に巫女みこはおりましたが、男性に伍しての修行者ではありませんでした。

釈尊在世中のインドでも六師外道などと呼ばれる精神界の優れた指導者をはじめ、六十二見等と伝えられる程数多い哲人達もいて、夫々に多くの弟子を抱え、しかも本来のバラモン教もしつかり根を据えていましたから、当時のインド世界

の宗教哲学論はまことに花々しいものがありました。勿論女性の参学もありましたが、それらは組織化されず、ただ修行女と呼ばれ、それぞれの教団の教えにしたがつて戒を守り、行を積んでいたようです。

釈尊は「無師獨悟」と言われるよう、ただ独りで開悟されましたが、成道直後から次々とお弟子が集り、やがて自然に男性ばかりの比丘集団が出来ました。

釈尊は成道後何年かしてカピラ城を訪問され、その後も幾度か帰られ、やがて父王が亡くなられると、柩をかつぐために多くの比丘と共にカピラ城外のマンゴー園にとどまられました。

ご承知のように、釈尊の生母マヤー夫人は産褥のうちに世を去り、妹のゴータミーは、第二の母として、釈尊の養育に真心を捧げ、又後室の最高責任者としてのつとめを果し、人々からマハー・パジャーパティー（大夫人様）と敬われながら、釈尊出家の折には

「食物、着物、寝具まで、最上のものをえらんでかしづいたのに、あの上品な手足が土や茨に臥そとは」

と、胸をかきむしって嘆いたと言われます。その彼女が夫王葬儀のあと、釈尊の

教えを慕つて出家を望んだ時、釈尊は許されませんでした。数度願つてその都度拒まれ、教団は遙か東南のベーサリーに風の如く去つたのです。

ゴータミーは後を慕う宮女達と共に髪を切り、黄衣をまとい、数百キロの道のりを跣足で追つて、ベーサリーの精舎の外に佇ちつくし、それを憐れんだ心優しいアーナンダ尊者のとりなしで、遂に釈尊の許しを得、ここに整然たる戒制を持つ尼僧集団が世界にはじめて誕生したのでした。ミッターも、バドラーも、そして釈尊の妃ヤソーダラーもその中にいました。



3. 一瞬のそれをも逃すな

Tisse yuñjassu dhammehi
khaṇo tam mā upaccagā
khaṇatītā hi socanti
nirayamhi samappitā. (5)

aññatarā Tissā

逃すな「法」に専注し

瞬時逃すなティッサーよ、
逃した者は墮地獄だじごくし、

愁い悲しむものとなる(5)

(もう一人の)ティッサー長老尼

ここで少し『テーリー・ガーター』についてお話をさせていただきます。

釈尊の多くの秀れたお弟子方のなかでも、特に高い境涯を得た男性の出家者は長老、女性のそれは、長老尼と呼ばれて尊敬をうけました。

人は、澄み渡った心境を得ると自然にその消息が詩の形で流露するらしく、釈尊教団の聖者達も多くガーター（偈・教えの詩）を残しました。それらははじめ口伝えに、そして後世、文字で残されたといいます。現在、

【長老偈】 本文21章 一二七九偈

【長老尼偈】 同16章 五二二偈

が知られ、それぞれに作者の名が添えられています。

しかし、もともとインド人はニックネーム好きで、親しい人ほど、或いは畏敬の対象ほど、いくつもの呼び名を挙げましたから、今となってはどれが綽名か本名かわからない事も多いのです。

たとえばエークダーニヤ長老という方は、釈尊のただ一ことを肝に銘じて日夜

口づさみ、精進して悟りを得、エークダーニヤ長老（一ノ）と誦えの長老さま）と呼ばれましたが、自分も悟りの一ことを遺して亡くなりました。

遺偈は『テーラ・ガーター』68番として残りましたが本名はわかりません。しかも、長老が生涯かけて大切にした

たとい教えを聞く」とが少くても、

身をもつて真理を見る人、

怠つて道からはずれることのない人

かれこそ道を実践している人である

という釈尊の一句は『ダンマパダ』259番として、今も私たちの面前にある訳です。

中村元『真理の「」と「」』 岩波文庫青302-1

「」にとりあげる」の5番の偈も、『テーラ・ガーター』や『ダンマパダ』にほんじ同じ形でおさめられて居るのですが、『テーリー・ガーター』だけは、まず、

「ティッサーよ」

と、女性形の呼びかけにはじまり、作者名をティッサー長老尼としている所に、編者的心づかいが感ぜられ、しかもティッサー長老尼と呼ばれた尼さまは一人居たらしく、ここで掲載を省いた偈の作者のティッサー尼がカピラ城の宮女と伝えられるのに對し、このティッサー尼を、わざわざ「もう一人のティッサー」と紹介しているのは、なかなか丁寧な編集のように感じられます。

さて、ここで、極く身近で入手の容易なテキストをいくつか紹介致しましょう。

『仏弟子の告白』 テーラ・ガーター

『尼僧の告白』 テーリー・ガーター

『長老の詩・長老尼の詩』

「世界古典文学全集6」「仏典I」

早島鏡正訳 筑摩書房

中村元訳 岩波文庫 青327-1 327-2

岩波文庫はすぐご入手になれます。筑摩書房・講談社の方は古書か図書館になりますが、三書とも抄訳ではなく、精力的な全訳で、両先生の御業績には思わず頭が下ります。

ただここで、生意気な申しようですが、岩波文庫の書名にある『告白』という文字にひかれて、決して「アベラールとエロイーズ」的期待をなさらないようあらかじめお願ひ致しております。

仏教の目指すところはそうした世界を超えており、いわれもない妄想の翼をひろげるのは、自分が損をするだけのことだからです。書名はあながち中村先生のご本意ではなかつたろうと思われて残念でなりません。右の三書のいづれにも、それぞれの偈にナンバーがふつてあり、P・T・S（パーリテキスト・ソサイアティ「ロンドン」）によるその数字は、大袈裟に申せば世界の共通ナンバーです。この小冊子にも、和訳の最終句の下に（）して、終始そのナンバーを使わせていただくつもりです。

最後に、今回の訳文に、「法」という表現を使いましたが、法の原語はサンスクリット語で「ダルマ」パーリ語で「ダンマ」。数千年のスパンを持つこの言葉は、教え、真理、天則、理法、正義、法則、道徳、法律、善行、すべての物事、現象などなど、多様な意味に使われ、その事だけで一冊の本を書いておられる先生もおいで您的ですが、私もあえて「法」という使い方を致しました。

ここで法とは何をさすか、釈尊はそれに対して何を勧められたのか——原文はヨーガという語のもとになる動詞が使われ、戦車に馬をつなぐ、しばりつけるというようなきびしい意味の命令形なので、今は亡き恩師早島鏡正先生の「専注」という訳語をいただいて使いました。



4. 母の至福

Buddha vīra namo ty atthu sabbasattānam uttama
yo mām dukkhā pamocesi aññañ ca bahukam janam. (157)
Bahūnam vata atthāya Māyā janayi Gotamam
byādhimaraṇatunnānam dukkhakkhandham byapānudi. (162)

Mahāpajāpatī Gotamī

生きとし生けるものなか

最上者たる雄者^{おさ}ブッダ

諸苦解き放つその君に

われこうより帰命せん(157)

マーヤー夫人^{夫人}がゴータマを

生み給いしは世の至福

病・死の鞭にひしがるる

苦の蘊^{あつま}を除かれぬ(162)

マハーパジャーパティー！
ゴータミー長老尼

前章で、仏教教団のなかの尼僧誕生に果したマハー・パジャーパティー・ゴータミーの役割に就いて申し上げましたが（P.17以降参照）、続いておそらく七十歳をこえた老齢で勇躍率先、世界の尼僧第一号として剃髪した彼女の、その後の生涯を辿ることに致しましよう。

結論から申せば、彼女はみごとに修行を果し、長老尼として『テーリー・ガーター』に六つの偈（悟りの詩）をのこしています。

ここに掲げたのはその最初と最後の二偈ですが、蒼古の韻律をもつそれらの偈を現代の日本語にうつすのはまことにむづかしく、原意に忠実であろうとすれば長くなり、階調を重んじれば原意をそこなうというわけで、諸先生方がほとんどすべて普通の文語体でこれらを紹介しておいでになるのは、実は抜きさしならぬ学問的良心からのことなのです。

今、おそるおそる七五調の私訳をかかげさせていただいたのは、訳者の私が全く無名の一私人である身軽さからですが、又、この二偈が比較的日本語におきかえやすかつたという事情にもあります。

釈尊をはじめ、古代の宗教者達には、詩の形で教えを説くという、広大な慈悲

心がありました。人々は口調よくそれを記憶して、くり返し囁みしめ味うことが出来ました。

レコードー、コピー機、インターネットと便利な分だけ、私たちの心は渴いて行くのかも知れません。

さて、この二つの偈にはさまれた残りの四つの偈を追つて行くと、釈尊がゴータミー尼に直接どのような指導をされたかがよくわかるのです。

釈尊は先ず、次のような「四聖諦」を説かれます。

- 1 人間存在は誰にとつても苦しみである。（一切は苦という真理——苦諦）
- 2 何故苦しむか。それは誰の心にも渴愛かつあいという燃えるような欲望があるから。
(苦しみの原因の真理——集諦)
- 3 しかし、それをなくすことが出来る。（苦の滅尽の真理——滅諦）
- 4 それには、やれば必ず出来る方法がある。（具体的な修行の実践——道諦）

では、具体的に何をどう実践するのか。それには八つのポイントがある。――

八聖道（八正道）

はっしょうどう

（1）正見（2）正思惟（3）正語（4）正業（5）正命（6）正精進（7）

じょうけん

じょうし

じょうご

じょうごう

じょうめい

じょうめい

じょうじん

じょうじん

正念（8）正定

じょうねん

じょうじょうじょう

ここに言われる「正」とは、完璧、パーソナリティ、どこからみても非のうちようがない等の意味で、具体的に言えば前記「四聖諦」を得心した上での正しい人生観が、（1）正見であり、そこを出発点として、（2）正しい考えが湧き、（3）正しい言葉のみが生れ、（4）正しい行いを励み、（5）正しい生活手段で生き、（6）正しい事のみに精を出し、（7）正しい「念」を持つ、と。

この「念」という言葉ほど仏道修行に大切なものはなく、仏教も数多くの坐禅觀法を説きますが、その中でも釈尊が説かれた最高の修行法——ヴィバッサナ瞑想とは、身・受・心・法（自分の体、その感覚、自分の心、そしてあらゆる物事の上に、瞬間瞬間現れては消え、消えては現れる現象）を、自分が自分に実況報告しつづける修行で、対象に専注しつづける心を「念」^{サナイ}といいます。

そして人は誰でも（1）から（6）までの徳目を実践して「正念」を得るのだと聞いています。

前出（3）番の偈で「ティツサーよ、もろもろの『法』に専注しなさい。一瞬のそれをも逃してはならない」という釈尊の言葉をかかげたのは、実はこここのところをふまえて文中の「法」を「教え」ととらず、「物」「事—現象」ととらえたかったからでした。

かくして正念から、（8）正定を得、解脱・涅槃^{げだつねはん}の至福を得ると、教えられております。

この「八聖道（八正道）」はまた「中道」とも呼ばれ、古くから日本に伝えられていましたが、何故か「釈尊は宮廷の悦楽と苦行の両極端を捨て、中道によつて悟りを得た」というような無責任な説明や、「中道」と「中庸」の混同などが長く行われて来たのは、私たち日本人にとつてまさに不幸なことであつたと思ひます。

正しい理解のため、是非正しい読書をおすすめ致します。

『中道の教え』アルボムツレ・スマナサーラ長老 日本テーラワーダ仏教協会

又、ヴィパッサナー瞑想の「念」については、

中部經典『四念處經』

長部經典『大念處經』

等を読まれるのもよく、パーリ語原典からの現代日本語訳もいくつか出ています。



5. 美貌の皇后

Daharā tuvam̄ rūpavatī aham̄ pi daharo yuvā
pañcaṅgikena turiyena ehi Kheme ramāmase. (139)

Nakkhattāni namassantā aggim̄ paricaram̄ vane
yathābuccam̄ ajānantā bālā suddhim̄ amaññatha. (143)

Khemā

あなたは若く美しく
わたしも若く身のさかり
さあケーマーよ一人して

五種の楽器で楽しもう

(悪魔のささやき) (139)

星を崇めるあなたがた
林の中で火を祭り
真理を知らぬおろかさに
それを淨しと思いむ (143)

ケーマー長老尼

ケーマーは生れながらに黄金の輝きを持つといわれた美しい王族の娘でした。

マガダ国^{マガダ}のサーガラ・ナガラという街に生れたといいます。サーガラは海、ナガラは都市という意味ですから、おそらくは海沿いの大きな町だったのでしょう。

彼女は美貌の故に国王ビンビサーラに迎えられ、皇后の位につきます。

夫の国王は、釈尊とは修行時代から心を通わせ、成道されるや聞法して預流果^{ヨリウ}（さとりの方向に向う流れに乗った境地。聖者の入り口に相当するさとり）の悟りを得て、竹林精舎^{チクリンショウジヤ}を寄進する等、在俗の信者として篤く帰依しましたが、ケーマー皇后は、なかなか釈尊にまみえようとはしませんでした。

「お釈迦さまは、美人に冷たい」

という風評をどこからか聞いて、臆していたのでした。美人は辛いのです。

王は一計を案じ、宫廷詩人に竹林精舎の園林^{おんりん}のうるわしさを詩にうたわせ、それに心を動かされた皇后は精舎を訪れて楽しく遊び、遂に釈尊のお姿の見える所まで歩を運びました。

その時釈尊は、神通力でケーマーの数倍も美しい天女を化作^{けさ}し、その美女が見

る見るうちに若さを失つて中年になり、老年になり、遂に最後にはたと倒れて動かなくなる所までを見せられました。

聰明な彼女は、一瞬のうちに愛欲を離れ、すべての悩みを超えた聖者の境地を得し、出家を決意して王宮に帰還し、国王の傍らに立ちます。すべてを察した王は、彼女を黄金の輿にのせ、比丘尼の僧院に送りました。

その後のケーマーは、釈尊から「聰慧第一」と認められ、蓮の花のように美しいといわれたウッパラヴァンナ比丘尼と並んで、尼僧教団中、美貌と聰明の双璧として、自らをきびしい修行の中に置いて生きて行きます。

冒頭の悪魔の誘惑も、

「私は人中最高峰なるみ仏に帰依し、
師の教えを守ることによつて、

あらゆる悩みから解放された」（144）

と、即座にはね返すのです。

それでも美貌の故の誘惑は絶えず、美しい二人は揃つて眼をくり抜いて与えたとか、内臓をつかみ出して見せたとか語られているのは、事実、神通もあつたのでしょうかが、実は南方仏教には、釈尊から二千六百年、この体のことをありのままにのみ觀る修行法が伝わつており、どのように觀るのかお知りになりたければ、左記の書をおすすめ致します。

『ブッダの」とば』（スッタニパータ）中村元訳 岩波文庫青301-1 P 45～47

「勝利」

日常読誦經典 P 46

日本テーラワーダ佛教協会

これは「勝利の経」といわれ、自分の体を可愛がるのは一つの執着であり、苦しみであり、それをのり超えるのは自分で自分の体をありのままに觀察するより他になく、釈尊の弟子の修行者たちは、体のことが気になつて修行出来ない心のわだかまりをのり超えるために、日夜この経を誦んだといいます。

そして一千六百年経つた今日でも、釈尊が教え遺されたヴィパッサナー瞑想の修行者たちは、熱心にこの經を讀誦するのですが、

このような身体をもちながら、自分を偉いものだと思い、また他人を輕蔑するならば、その人は「觀る能力がない」という以外の何だろう

というような、きびしい言葉で結ばれるこのお經は、はじめは通讀するには耐えないかも知れません。

殊に、美人は途中で投げ出すでしょう。美人は常に辛いのです。

身体への執着に対する、釈尊や二人の美しい長老尼たちのシビアな接得は、神通によつたのか、或は「勝利の經」のような内容を丁寧に説き示したのか、答えは私たち各人の、読みと実証によるしかないと思われます。

或る時、隣国コーサラのパセーナジ王が、ケーマーに質問しました。

「尊い方よ、如来は死後に存在されるでしようか」

「大王よ、如来は死後に存在すると、世尊は説かれないのでしょうか」

「では、存在されないのでですか」

「世尊はそうも説かれないのでしょうか」

質問と答えは更につづき、最後にケーマーは言います。

「大王よ、ガンジスの砂の数を数えることが出来ますか。海の水を、瓶に何杯と数えることが出来ますか。同様に如来のお体、如来のお心、如来のお心のはたらきを量り知ることは出来ないのでしょうか」

パセーナジ王は満足して去り、後日、釈尊に同じ質問をした所、釈尊の答えは、一言一句ケーマーのそれと違わなかつたといいます。



6. 心にこころ許すな

Gutte yadatthāṁ pabbajjā hitvā
puttaṁ samussayam
tam eva anubrūhehi mā
cittassa vasam̄ gami. (163)

Guttā

子も財も捨てグッターよ
至高を目指す出家者は
よく目的を修習し
心に支配 なされそ (163)

グッター長老尼

【六方礼経】

という南方の仏教徒なら誰でもよく知っている古いお経があります。

これは、釈尊当時国勢をのばしつつあったマガダの都、王舍城おうしゃじょうで、毎朝きまつて六方を拝んでいたシンガーラという若者の為に、本当に淨らかな六方礼拝の仕方を説かれたもので、釈尊は本題に入る前、まず日常生活のありようを細々と注意しておられます。

例えば「励み」と「怠け」について、「怠け者」は

「寒すぎる」と言って、仕事をしない。

「暑すぎる」と言って、仕事をしない。

「朝早すぎる」と言って、仕事をしない。

「夜おそすぎる」と言って、仕事をしない。

「お腹がすいた」と言って、仕事をしない。

「満腹だ」と言つて、仕事をしない。

と。

これを自分にあてはめて見ますと、本当に人の心の中というものは「よい事をしよう」、「しっかりと励もう」等という善心は誰の胸の中にもありますけれど、一

方では、それを押しのけて、「いや」とか、「でも、しかし」とか否定して逃げたい心も必ずあつて、それが上になり、下になり、心同志がもみ合つて、大ていは「怠け」の方が勝つことが多いのですが、でも、時にはその同じ心が「怠け」に勝つて、「励み」の人となることもあるのが普通の人間です。

私達は、心といえば、西洋の人達が描いてみせるハート形の一塊りで現せるようには思ひ勝ちですが、実は少しよく気をつけて自分の心を観察してみると、それはファイバー光線のように多岐多様で、尽十方に向つて走つており、常にもつれ合い、からみ合い、善と悪と、無記の様相を無限に展開しながら流れつづけて行くものだということがわかります。

一口に

「仏教とは何ですか」

と聞かれたら、

「自分の心の流れを、出来るだけ清く育てて行こうとする教えです」と答えることも出来るかも知れません。

その心の清らかさも、こわさも、とことん知りつくされた釈尊は、「心に支配されではならない」

と、いつも温情溢れるきびしさで、忠告をくり返されたのでした。

グッターは、ガンジス北岸で、南のマガダに対峙するコーラサラの都、しゃえふじょう舍衛城に住む、バラモン人の娘でした。

インド社会で最高の階級に生れ、恵まれた環境にあつたのでしょう。比丘尼第一号として出家した、釈尊育ての母君マハー・パジャーパティー・ゴータミーの手引きで出家したといわれます。

「テーリー・ガーター」の偈の数の、二倍半もある「テーラ・ガーター」でも、釈尊が直接その人の名で呼びかけられた偈を、私は知りませんし、「ダンマパダ」でも人名の出るのは唯一回。ですから幼稚な私など、釈尊が一度その名を口にされたらしい「ダナパーラカ」という一頭の象にさえ羨望を禁じ得ない程ですのに、女性の修行者のためには、夫々の人の名で呼びかけた教えの詩を、すでに幾編もご紹介しました。

その中で釈尊は、優しい心づかいと共に、滅法きびしい教えを手渡しておられます。長らく女性の出家者を拒まれつづけた釈尊でしたが、一たんこれを容れられたあとは、比丘尼の保護と育成のため、さまざまに心をくだかれたことがよくわかります。

最後に申し添えれば、私はこのグッターの偈の邦訳を、「なされそ」という言葉で結びました。若い世代の方々は、或いは馴染みうすく感じられたかも知れませんが、これは皆さまよくご存知の、東北地方への入り口、奥羽三関の一つの「勿来の関」を思い浮かべていただければよくわかります。

かつてそこは「夷人よ来るな（な来そ）」、夷人の側からすれば「大和人よ來な（な来そ）」という境界線であつたわけで、今でも常磐線で三陸海岸を北上すれば、平の手前に「勿来」の駅があり、いわき市に属します。

かつてここを通る時、

吹く風をなこそその関と思へども 道もせに散る山桜かな
と詠んだのは、風流公子、源義家でした。

6. 心にこころ許すな

せっかくの花が散るから、風よ吹いて来るな（なこそ）という優しい心も名をも残したわけです。

「な」とかけて「そ」と結ぶのは、よく使われる強い願望を伴った禁止の表明ですから、「心に支配 なされそ」は、「心に支配されるでないぞ」という意味になります。

心こそ こころ惑わす 心なれ 心にこころ こころ許すな

という歌の作者名は、いろいろあげられますが、もとを糺せばただこの釈尊の教えを、昔の誰かが歌にのこしてくれたのでしょう。

(さて、最後に、七五調の結びが四文字でおわっているこの訳偈を、読者はどのような階調で吟んでくださるでしょうか、詩に親しむのは、諧調を体でうけとめることですから……その息遣いを——。)



7. 前世といふもの

Tass' etam kammaphalam yam
mam apakaritūna gacchanti
dāsī va upatṭhahantim tassa pi
anto kato mayā ti. (447)

Isidāsī

つしみ仕つかう我を捨て
彼らが遠く去りにしは
みな前まへの世よのなせる業わざ
われその決済をなしとげぬ(447)

イシダーシー長老尼

『テーリー・ガーター』は、一人の尼僧の名で一つずつの詩句が収められた「序の詩句」という章にはじまり、つづいて一人に一句ずつの「二つずつの詩句集」、「三つずつの詩句集」というように次第に数がふえて行き、最後に七十四の詩を収めた「大いなる詩句集」で終るのですが、その一つ手前に「四十の詩句集」という章があつて、ここにヒロイン、イシダーシー長老尼の四十七の詩句が收められています。

そのうち、はじめの五句はプロローグとしておそらく編者が加えたものでしょ
うが、六番目の詩で

「私が出家した次第を聞いて下さい」

と言つて、心許す修行の友ボーディー尼から問われるままに、イシダーシー長老
尼ははじめて口を開くのです。

私は（遙か西方の）佳き都、ウッジエニーの豪商の一人娘として大切に育て
られ、（コーサラの都に近い）サーケーターの豪商の家に嫁ぎました。

私はつっしんで夫の両親、親族に仕え、夫の身の廻りの世話に心を碎き、母が

一人子につくすような思いでかしづきました。それなのに夫は、「イシダーシーと同じ家には住みたくない。私は出て行く」と言い出し、結局、私は実家に返されました。

父は私を第二の富商に与え、私は婢女はしためのようにいそしんで夫に仕えましたが、一ヶ月が終った時、私は再び実家に返されました。

父は今度は、托鉢のために立寄つた一人の修行者を私の婿として迎えましたが、又もや一ヶ月が経つと、彼は

「イシダーシーと同じ家には住みたくない」

と言い出し、結局迫われて出て行きました。

私は独り思ひ耽りました。許しを得て私も出て行こう。死ぬために——。或は、出家するために——。

その時、尊いジナダッター尼は托鉢のため遍歴して父の家に来られました。私は心からお仕えし、そして言いました。

「尼さま、私は出家しとうござります」

父は言いました。

「娘よ、家に居て、ブッダの教えに励みなさい」

私は泣きながら言いました。

「悪業を滅ぼしたいのです」

父は言いました。

「さとりを得なさい。最高の真理を得なさい。尊いブッダが実証された安らぎを得なさい」

私は出家して七日目に三種の明智みょうちを得、自分の過去七世を知りました。ボーディー尼よ、あなたにそれを話しましょう。一心に聞いて下さい。

ここで言う三種の明智とは、宿住智しゅくじ、天眼智てんげんち、漏尽智ろうじんちのことですが、今はただ宿住智とは自分と他者の前世を知ることが出来る能力だと、一応理解なさって下さい。イシダーシーはその能力を得て、自分の過去の姿を七世まで溯つて明らかに知り、それを友に語りはじめます。

(遠い昔)、私はエーラカカツチャの街の裕福な金細工師でしたが、若氣の至り

で、他人の妻と親しみました。

死後、地獄に墮ち、報いが熟して牝猿の胎に宿り、生れて七日目にボス猿によつて去勢されました。他人の妻を犯した報いでした。

インダス河畔の森で死んだ私は、山羊の胎に宿り、生れるとすぐ去勢され、十二年間子供達を背にのせて運び、虫類に悩まされ、病氣にもかかりましたが、皆他人の妻を犯した報いでした。

私は死に、牝牛の胎から再び生れ、十二ヶ月で去勢され、犂と車をひき、盲目となり、悩み、病氣にもかかりました。かつて他人の妻を犯したためです。

再び私は死んで、街道沿いの婢女の家に生れ、男でも女でもありませんでした。三十歳で私は死に、車夫の家の娘に生れました。その家は多くの借財をかかえ、それがかさむと、幼い私は家から引きずり出されて連れて行かれ、十六歳になつた時、ギリダーサという名の主家の息子は私を嫁にしました。彼にはすでに妻があり、婦徳の高い人で夫に愛されていました。私は夫に憎しみの念を抱きました。ここまで一気に語ったイシダーシー尼は、最後に冒頭の（47）の偈を述べて、愛する父が出家に際して贈つてくれた言葉通り、「尊いブッダが実証された究極

7. 前世といふもの

の安らぎを私は得た」と獅子吼します。イシダーシー尼は説法上手であつたと言われます。

本来、私のような未熟のものが輪廻について語るべきではありません。しかし、どうしても避けて通れない根本義ですのでイシダーシー尼の偈をかりて、その世界を垣間見ました。



8. 真実を語る人

Ediso ahu ayam̄ samussayo
jajjaro bahudukkhānam ālayo
so' palepapatito jarāgharo
saccavādivacanam̄ anaññathā. (270)

Ambapālī

合成のこの身老い果てて
もろもろの苦の仕舞い倉
塗料の剥げし古小屋ぞ
真実説く人 偽らず(270)

アンバーリー長老尼

- 一 毛先がすこしカールした漆黒の髪
芳しく薰り、花で飾られた頭
- 二 美しく結い上げられた髪型
- 三 柳目美事に黄金でまとめられた黒髪の房
- 四 絵にかいたような眉
- 五 マニ宝のように輝き、深い紺色の、切れ長の目
- 六 優しく隆起し、誇り高い鼻筋
- 七 精巧に仕上げられた腕環のような耳朶
- 八 芭蕉の新芽のようにつややかな皓齒
- 九 森に囁くコーキラ鳥のようないろんな聲音
- 十 よく磨かれて滑らかな、法螺具のようないろんな項
- 十一 門のようにしつかりした、ふくよかな両腕
- 十二 すべすべと柔らかく、黄金に飾られた手
- 十三 豊かにふくらみ、均整がとれ、上をむいている乳房
- 十四 磨かれた黄金のようないろんな肢体

十六

象の鼻のように立派な両腿

十七

黄金の足環で飾られた、なめらかで美しい両脛

十八

綿をつめた靴のように、むつちりとした両足

若い時の私は、このように蠱惑的こわくつきであつたと、アンバパリーは追想します。

それが、今は、老いのため、

一 髪は麻の表皮のようになりました

二 頭は兎の毛の臭いがします

三 髪はあちこち薄くなつて、禿げています

四 頭髪は抜け落ちました

五 眉は皺がよつて垂れ下がりました

六 老いの瞳は美しくありません

七 鼻も干からびました

八 耳朶に皺がより、垂れ下がっています

九 歯は欠け、麦のように黄ばみました

- 十一 声はしゃがれました
十一 項は折れ曲がりました
- 十二 両腕はバークリ樹のように弱りました
十三 両手は樹の根か、球根のようです
- 十四 乳房は水の入っていない皮袋のようです
十五 全身細かい皺がよっています
- 十六 両腿は竹の幹のように細りました
十七 両脛はまるで胡麻殻ごまがらです
- 十八 両足はあかぎれし、皺がよっています
- アンバパーリーは一つずつ正直にチエツクしながら、諸の要素の集合体としての自分の上に、無常・苦・無我を見究め、
- ああ、釈尊の説かれたことは、まさにすべてその通りであつた。釈尊こそは「真実のみを語る人」であると、改めて一つひとつ讃嘆しています。

彼女は父の名も、母の名も知りません。おそらく自分自身の名さえも——アンバという実のなる樹の根元に寝かされていたのを、樹園の番人に拾われて育てられたところから、アンバ・パーリーと呼ばれたといいます。

育つにつれ、天成の美質が輝き出して、土地の貴公子たちをはじめ、諸方の王侯、貴紳からのプロポーズが殺到し、さばき切れなくなつたため、裁判官たちが相談し、結局、公認の遊び女にすることにしました。インドに限らず、古代の都市にはよくあつた風習で、彼女たちは賢く、美しく、教養があり、技芸に秀で、応接に巧みで、社会的地位と財産を持ち、町の誇りとして豊かに暮らしていました。アンバーリーはその中でも代表的な一人として知られるようになつて行きます。

そこは、リッチャビ人たちが共和制を布いていたヴェーサーリーの都で、人々は明るく商才にたけ、色とりどりの派手な服を着こなして、馬車で行き交つていたといいます。

コーラの舍衛城からはるかの東南、マガダの王舍城からもガンジスを北に渡つたかなり北方ですが、釈尊はこの国の人たちと古くから仲好しで、遊行の途次によく立ち寄られました。

ある時、釈尊が近郊のコーディガーマ村に入られたという消息が街に伝わると、アンバパーリーは馬車を仕立ててお訪ねし、はじめて釈尊を拝して説法を承け、感佩した彼女は、翌朝の食事の布施を申し出で、釈尊が無言のうちにこれを承引されると、悦びに溢れて、自分の所有する庭園で行き届いた食施を済ませ、食後にその庭園を、ブッダとその教団に捧げました。

それは「アンバパーリーの園」と呼ばれ、後日、釈尊がその園でされた説法がいくつか經典の中に今でも残っています。

アンバパーリーは、釈尊の導きのままに、生涯在家信者として五戒を守ることを誓い、これを実行しましたが、彼女にはヴィマラという息子があり、釈尊の姿に心打たれて出家し、修行の甲斐あつて悟りを得ました。

そして、母アンバパーリーも、息子の導きによつて出家し、遂に悟つたのでした。息子は釈尊の教団でヴィマラコンダンニヤ長老と呼ばれ、「テーラ・ガーター」第七章に不思議な一偈を残しています。

註釈書によれば、それは「母はアンバパーリー、父は（マガタ国の）ビンビサーラ王」と読めるのだそうです。



9. 悪の清め

Upahi buddham saraṇam
dhammam saṅghañ ca tādinam
samādiyāhi sīlāni
tan te atthāya hehit. (249)

Puṇṇikā

もし水が

すべての悪を流すなら

蛙も亀も 清いでしよう

もし河が

あなたの悪を流すなら

あなたの善も流すでしよう

あらわにも

ひそかにも悪を行わず

帰依三宝し 戒を持せ(236～251)

ブンニカー長老尼

ブンニカーは、祇園精舎を寄進した斯塔ッタ長者の家の水汲女でした。

彼女は役目柄、寒いときもつねに水に入らねばなりませんでした。貴婦人たちから叱られたり、罰せられたりはせぬかと、いつも心におびえながら――。

しかし、篤信の長者の身辺にいた幸運で、やはり何かにつけ、釈尊のお姿を遠く見かけたり、教える一言でも小耳にする機会に恵まれたのでしょう、彼女の心は次第に育つて行きました。

その、育った心で見てみると、自分が毎日水を汲みに行くその川で、いつも沐浴しているバラモンがいるのでした。

手足が凍え、ひどく寒そうにしているその姿に、彼女は思わず声をかけました。

「バラモンさん、何をおそれて、そのようにいつも水の中に入るのですか」

沐浴バラモンは答えました。

「ブンニカーサン。あなたはわたしが善い行いをし、悪い行いをすまいとしていることを知っているでしょう。川の水で身を清めることで、悪業から脱れることができます」

釈尊はよく

「偉い先生が言つたからといつて、
尊い書物に書いてあるからといつて、
多くの人が信じているからといつて、
或いはまた、この私（釈尊）が言つたからといつて、
すぐに信じてはなりません。

理性をもつて、よく考えて、正しいと納得出来たらお信じなさい」と
言われるのが常でした。

ところがこのバラモンは、昔の偉い仙人が言つたからといつて、『ヴェーダ聖
典』に伝えられているからといって、世間みんなが信じて実行しているからとい
つて、寒さに耐えつつ沐浴しているその姿に、彼女は思わず切り返します。

「一体誰が、真理を知らぬままに、真理を知らぬ者に向つて、そんなことを説
くのですか」

その後の展開は、冒頭の詩の第一句と第二句の通りです。

そしてブンニカーは、

「あなたがいつも恐れて水に入つて行つたところのその悪をなさるな。体をい

たわって下さい」

と励まし、はじめて覚めたバラモンは

「至らぬ道を行く私に、あなたは尊い道を教えて下さいました。この浴衣を差し上げましょう」

と言い、それに対しブンニカ一は、

「それはあなたのものにしておいて下さい」

と辞退し、冒頭の詩の第三句を言うのです。

「どんな場合にも絶対悪いことをせず、仏・法・僧の三宝に帰依し、戒を保つてお暮しなさい」

と。

バラモンは、

「今まで私は、ただブラフマン（梵天）^{ぼんてん}の親族として生れたバラモン人でしたが、今こそ眞の宗教者バラモンです。仏・法・僧の三宝に心から帰依します」と悦びました。

ブンニカ一はこのバラモンを説得した後、心境がかたまつたのでしょうか、長者

の許しを得て出家し、やがて長老尼となつたといいます。

研ぎすまされた刃物のように冴えた釈尊の説法に心惹かれた昔日^{せきじつ}の私は、この
ブンニカーラニ長老尼の話を聞いて、

「勇将のもとに弱卒なし。ブンニカーラニさんの説得の仕方も、お釈迦さまそつくりだ。いいぞ、いいぞ！」

などと、ひそかに悦んだものでしたが、でも今は、少しちがいます。

水汲女ブンニカーラニが、沐浴バラモンを折伏まがいに説得して、のちのちの世の
私までが快哉を叫ぶかのように感じていたのは懲愧^{さんき}の至りで、多少の年を重ね、
今ここに改めてブンニカーラニ長老尼の名で残された十六句にも及ぶ偈^げを読み返して
みると、（おそらくは年老いた）バラモンの沐浴姿に、同じ水中の辛さを知る水
汲女としての同情と共感、真理を知る者として、

「そんな馬鹿なことをしないで、体を大切にして下さい」

と思わず駆け寄りたい程の優しい思いやり。

「お礼にこの浴衣を差し上げたい」

というバラモンに、

「それはあなたのものにしておいて下さい。私はほしくありません」「ことわる女らしい節度。

今の私は、そのことごとくに広大な彼女の慈悲心を感じずにはいられません。

慈船 智水に 浮かぶ

という言葉があります。

慈悲の船が、智慧の水に浮かんでいるというのですが、これはまた

智船 慈水に 浮かぶ

とも言い替えられる筈だと思うのです。



10. 向上の人

Chandajātā avasāye manasā
ca phuṭā siyā
kāmesu appaṭibaddhacittā
uddhamṣotā ti vuccati. (12)

Dhammadinnā

意欲をおこし 意をかため

修道の心にみちてあれ

こう諸慾に著せぬを

「向上者」とぞ世には言う(12)

ダンマディンナー長老尼

ダンマディンナーは王舎城の町に棲む幸せな人妻でした。夫のヴィサーカは、ビンビサーラ王と友達づき合いが出来るほどの資産家で、誠実に妻を愛してくれていました。

ところが、その夫が近頃変なのです。家に帰つて来ても、いそいそ出迎える彼女には無関心に、黙々と食卓につくようになつたのです。たまりかねた彼女が「あなた、何かお気に召さないことでも」と尋ねると、夫は言いました。

「済まない。実は大王のお傍でブッダのみ教えを聞くうちに、私の心は次第に育つて、あと一歩で最高の悟りに届くところまで來たのだ。私はもう世俗を捨て、女性とのかかわりも持たない。あなたはこのままこの家に居てくれてもいいし、望むだけの財産を持つて、実家に帰つて暮すのもいい」

妻は即座に言いました。

「財産はいりません。出家します」

頭を剃つた彼女は、遠く都をはなれ、一心に励んで、遂に聖者の境地を得、再

び都にもどり、かつての夫婦は久々に対面しました。ヴィサーカは、在家信者の礼儀から、かつての妻を恭々しく礼拝し、先ず

「自我とは?」

と問い合わせると、

「五蘊（色・受・想・行・識）」

という明快な答えが返つて来ました。問答は次第に高い境涯に及んで白熱化し、三十三もの応酬の涯て、涅槃（ニルヴァーナ）に言及しかかった時、ダンマディングナーは決然と、

「友、ヴィサーカよ、その質問はおかしいです」

と、その理由をのべ、

「もし不審なら、ブッダにおたづねなさい」

と言つたので、彼は釈尊をお訪ねして一切を申し上げると、釈尊は、

「ダンマディングナーは正しい。ダンマディングナーは賢い」

と、賞められたといいます。（註①）

その後、彼女は各地を遍歴して人々の幸せのために法を説きつづける大長老尼

となり、多くの弟子も育てました。

彼女が祇園精舎の近くの尼寺に居た時、近くにパセーナディ王の兵士の宿舎があり、兵士達は平時にはつい賭け事などに耽つてしまふので、妻たちは満足に着るものもないような生活に甘んじながら、ただ無意味にふざけ合つている姿を見て氣の毒に思い、無駄づかいのせめて半分は蓄えにまわすように勧めてみると、目に見えて暮しが改善されたので、これも、みなあの尼さまのおかげだと、夫婦相談してお札に食事を布施しようとしたところ、却つてダンマデインナーから、「ちょうど、ブッダが祇園精舎にご滞在だから、ブッダをこそご供養なさい」と教えられ、安居（雨季の間、精舎に集まつてする修行）の間、一心に供養をつづけて次第に帰依の心を深め、殺生の罪を悟り、慈悲の心を育てていきました。ちょうどその頃、辺境に反乱が起り、宿舎の兵士たちにも動員令が下りましたが、王の側近たちは心配して、

「王さま、あの者たちはとてもお役に立ちますまい。まるで出家者のように殺生をつっしんで暮しております」
と進言しました。

しかし、兵士たちは、「王さまの為なら」と、進んで出陣し、いよいよ決戦の前夜、彼らは闇に身をひそめて、ただひたすら釈尊に教えられた「慈悲の瞑想」を修しました。そして、

『生きとし生けるものが幸せでありますように』

と、ひたすら念じつづけ、その慈しみの心のエネルギーを感じた敵は、「今度の相手はどうもいつもと違うようだ」

と、夜のうちに四散し、みごと慈しみが戦いに勝ちました。（註②）

喜んだパセーナジ王は、兵士達に二倍の賞与をあたえ、給料も上げてやつたといいます。このように人々の幸せのために挺身するダンマデインナー長老尼をたえた釈尊の直々の言葉と伝えられている偈が、いまも残されています。

過去世も

きたらんよ
来世にも はた現世も

けがれ
心の著すべてなし

それをバラモンと 我は呼ぶ

『法句經』(4)

「ハ」や「圓われるバラモン」とは、最高の悟りを得た修行者、聖者、アラカンという意味であります。

註

①この夫婦の問答は、パーリ語原典でも、また漢訳「法華比丘尼經」でも読めますが、現在、左記をお勧めします。

北島泰觀訳注

「ダンマバダ」その五 PI62-167

「ダンマバダ」全一巻 P461-464 (右のアップグレード版)

中山書房仏書林またはスリランカの店「ウイカ」0743-52-3228

②「慈悲の瞑想」については

「慈經」(CD付) —原典と日本語訳—

「ヴィパッサナー実践&慈悲の瞑想」(ビデオ) アルボムツレ・スマナサーラ長老

日本テラワーダ佛教協会03-5738-5526



11. 夫婦のえにし

Putto buddhassa dāyādo
Kassapo susamāhito
pubbenivāsam̄ yo vedī
saggāpāyañ ca passati. (63)

Bhaddā Kapilānī

ブッダの子にして相続者
マハーカッサバは定に入り
過去世のことをよく知りて
天界・地獄を見極めぬ(63)
バッダー・カピラーニー長老尼

輝く金髪を夫ピッパリの手で剃り落してもらつたバッダー・カピラーニーは、夫と共にマハーティツタ村の館を抜け出しました。広大な莊園を持つこの夫婦は、所領のバラモン村を抜けて奴隸村に入り、

「自由になりなさい」

と言い渡し、泣き縋る彼等をおいてひたすら急ぎました。

道はやがてナーランダーの街道に行き当ります。右をとれば数刻でマガダの都、王舍城。左をとれば二日ほどの行程でパータリー村（現・パトナ）の渡し場、ここでガンジスを越えれば、向こう岸にはコーサラやカーシーの国々がありました。

岐れ道に佇ち、恭しく夫を礼拝したバッダーは、左に路をとつて独り往き、往き往いて遂にコーサラの都、舍衛城に入り、或る修行女の集団に投じて、各地を遍歴しつつ真理を求めましたが、どこか意に満たなかつたのでしょう、やがて再び南に下つて、ガンジスのほとりに庵を結んでいたといいます。すでに五年の歳月が流れていきました。

そんな彼女のもとに、ある日、一人の見知らぬ尼僧が訪ねて来ました。ピッパリの使いと名乗るその人に聞けば、あの別れの夜、右の道を辿つたピッパリは、

街道沿いの一本の大樹のもとに、光明に満ちて坐つておられる釈尊のお姿を遠く認めて恭しく近づき、礼拝して法を聴き、即座に帰依し、数日後、一緒に都の竹林精舎に帰り、今は立派に修行を成就して、マハーカツサパ長老（摩訶迦葉尊者）と言われる人となつてゐるというのです。

容易に女性の出家を認められなかつた釈尊も、育ての母君、マハー・パジャーパティー・ゴータミーのたつての願いに動かされて、仏教教団にも尼僧のサンガが生れ、すぐれた長老尼たちが輩出するのを目の当たりにしたカツサパ長老は、ガンジスのほとりで侘び棲みすると風の便りに聞いているバッダーも、仏教の尼僧としてバッダの教えを参究し、眞の平安と幸福を得て欲しいと望みましたが、たとえかつての夫婦ではあつても、比丘が単独で修行女を訪ねることは出来ません。そこで、これと見込んだ尼僧に頼んで、はるばると使いに立つて貰つたのでした。

もともとこの夫婦は、美貌の模範青年ピッパリと、三国一の黄金の花嫁バッダーとの縁組でしたが、二人とも心中深く出家の志を持つており、婚約の時から言い交わして、婚礼の後もベッドの中央に花束をおき、清い夜を守ること十二年で

あつたといいます。

やがて両親を見送り、莫大な遺産を相続したピッパリは、その監督責任の地位についてみてはじめて労務者の辛苦、牛馬の痛ましさをしりました。

そして在る時、農夫が掘り起こす畠土から這い出る虫をすぐに啄む鳥たちの群れを目の当たりにし、その殺生の責任がすべて自分にあるようを感じて心わななき、若い時からの出家の志を貫こうと決心しました。

同じ時、バッダーも、邸の中で傍女たちに胡麻を壺から出して乾させていると、ここでも小さな虫がゾロゾロと這い出し、すぐそれをつつきに来る鳥たちの姿に、バッダーは、地主の妻としての自分の務めが、みな人を使って行う殺生であることに気づいて心わななき、若い時からの出家の志を貫こうと決心しました。

その夜、二人は互いに髪を剃り合い、ひそかに高殿を下りて走り出しますが、その時の心境は、まるでこの世は燃える草小屋のように思われ、頭上に降りかかるその火の粉を「アチチ、アチチ」と振り払いつづけて行くような気持ちであったといいます。

このようなナーランダーの別れから五年、別れた夫婦は再び相見えることになりました。

折しも釈尊は、コーサラの祇園精舎に居られ、マハーカツサパ長老も従っていました。バッダーは一目で釈尊に帰依し、ブッダは彼女をゴータミー長老尼のところに送つて尼僧の資格を得させ、やがて彼女は聖者の境地に達します。

「聖人、聖人を知る」とか、至高の悟りを得たバッダーは、マハーカツサパ長老の境地をも自分のもののようによく知つて、冒頭の偈をはじめ、四つの偈で、かつての夫と自分の境涯をうたいます。

「私達二人は、この世間の禍わざわいをみて出家し、私達は、今このように平安と清涼を得ています」（テーリー・ガーター65・66）

と。かつての妻から贈られた稱讚しょうさんの通り、マハーカツサパ長老は、釈尊の後事を治めて第一次經典結集けつじゅうをなしとげ、やがて鶏足山けいそくさんに入つて入滅したといわれ、今もかつての王舍城おうしゃじょう、現在のラジギールもうに詣でれば、街道の彼方にその峰の姿を望むことが出来ます。

カツサパ長老は十大弟子中、頭陀ずだ（むさぼりの心をなくす修行）第一といわれ、生涯貴顯きけんに近づかず、乞食こうじきによつて生き、【長老偈テーラ・ガータ】に四十二の偈を残しました。そのうち頭陀行の偈をご紹介しましょう。

「私は鉢はつを捧げて癪者に近づき、彼は一握りの食じきを私の鉢に投げ入れた。その時、彼の指も亦、鉢の中に落ちた。一握りの食を食べる時も、食べ終わった時も、私に嫌悪感はなかつた」（テーラ・ガーター1054～1056の要約）



12. うるわしのナンダー

Āturam̄ asucim̄ pūtim̄ passa
Nande samussayam̄
asubhāya cittam̄ bhāvehi
ekaggam̄ susamāhitam̄. (19,82)

Nandā

ナンダーよ

見ずや不淨の合成身

病み腐れるをとくと見よ

こう一処に專注し

身はこれ不淨の観をなせ(19、82)

(二人の)ナンダー長老尼

古代インド語で *nanda* は歓喜を意味しました。目出度い言葉だからでしょう、釈尊の教団の中にも、ナンダを名乗る修行者が、男女ともに幾人もありました。先ず、育ての母君が生んだ釈尊の異母弟がナンダ。その妹はナンダー（ナンダの女性形）でした。成道後、遊行説法四十五年のうち、後半二十五年をまめやかに随侍した年下の従弟はアーナンダ。

アーナンダのとりなしで辛くも成立をみた尼僧の教団の中でも「二人のナンダー」はよく知られていますし、ナンドーッタラー（より佳き悦び）という名の尼様もいました。

さて、尼僧の中で何故二人のナンダーが名を残したかというと、二人揃つて「スンダリー・ナンダー」と呼ばれるほど美しかったのだといいます。スンダラは美妙を意味し、スンダリーはその女性形です。

それほどの麗人が何故若くして出家したのかというと、先ず一人のナンダーは釈尊の故郷カピラ城の貴族の娘で、父親のケーマカは篤く釈尊に帰依して、城外にニグローダ精舎を建てて教団に布施し、釈尊は故郷に帰られると、しばしばこ

ここに滞在されました（出家は王宮などに起居しないのです）。

ケーマカ夫妻は美しい娘のナンダーをいつくしんで、年頃になると、多くの縁談の中からチャラブータという同族の好青年をえらび出し、盛大な結婚式の準備にいそしましたが、どうしたことか、肝心の花婿が式の当日急死してしまいました。当時のインドでは、たとえ婚約中の花婿の死であっても、残された女性は、未亡人として残りの人生を送るのが社会常識だったそうで、愛娘の将来を案じた両親は、いやがるナンダーを無理矢理出家させてしまいました。

一方、もう一人のナンダーは、前述の通り釈尊の異母妹に当る麗しい王女でした。成道後、いくばくかして釈尊が故郷に帰られた時、折から城では異母弟ナンダの立太子式と、結婚式が同時に行われようとしていたといいます。それに対して釈尊は、ナンダに祝いの言葉を述べられると、手にした自鉢を黙つてナンダに渡し、そのまま漂と立ち去られ、ナンダはやむなく釈尊の鉢を捧げて後を追い、釈尊は驚いて追い縋る花嫁スンダリーにもかまわず歩を進め、城外のニグローダ園で、いやがるナンダを無理矢理出家させられました。

やがて父淨飯王も逝き、母マハー・パジャーパティー・ゴータミーが、釈尊の夫

人ヤソーダラーリ姫をはじめ多くの宮女たちと大挙して釈尊の許に投じ、尼僧のサンガ（僧団）が成立するわけですが、末妹のナンダー姫も、この時、或いは少し後に、前出のもう一人のナンダーと前後して、サンガに加わったものと思われます。しかし、二人のナンダーは、共に若さと美貌の誇りが捨て難く、意識して釈尊の指導を避けていました。それを釈尊の方から呼びかけさせとすようにして導かれたのでした。一人のナンダーは、冒頭の偈をあげて、

「尊き師は、このように、この偈をしばしば唱えて、見習尼ナンダーを教えさせられた」

と、わざわざ言い添え、もうひとりのナンダーも、全く同じ偈を唱えている訳です。これは決して重複や混線ではなく、実際に釈尊は、二人の美しいナンダーの顔を見るたびに、口をすっぱくしてこの二人の為の教えの句をしばしば説いて聞かされたのでしょう。

小学校に上がつたばかりの太郎に、先生は $1+1=2$ と、花子にも $1+1=2$ と教えます。それ以外の答えを教えたたら先生ではありません。

これをマスターした太郎も花子も、やがて千変万化の人生を送れるようになります。

ます。それでもその人生の公式は $1+1=2$ です。死ぬまで変らず、死んでも変りません。いついかなる所でも変わらない公式が真理です。釈尊は人類のために「生きる公式」を説いて下さった唯一のお方です。

釈尊の導きによつて何時しか修行に励むようになつた一人のナンダーは、やがて自分で自分の心のうちなる「慢」をほろぼして心静まつた日々を送り、もう一人のナンダーも昼夜怠ることなく我が身を觀察し、智慧によつてその本性を見、嫌悪して「慢」と「執」を離れ、心静まり、安らぎを得たと、述懐の偈を残しています。

最後に、いやいや出家させられた義弟ナンダも、はじめ王宮の生活や、美しい許嫁のことが忘れられず苦しみましたが、釈尊の懇ろな導きの力で、後には立派に悟りを成就し、説法の才によつて人々の幸せの為に尽くしました。

その身丈は釈尊よりちよつと低かつたそうですが、風貌が酷似しており、遠目では見分けられず、誰でも釈尊が来られたかと起立してしまないので、特別のちがつた色の衣を着て貰つたというような話まで残っています。

釈尊も

「比丘の中で、端正といえば、先ずナンダであろう。そして諸根の清らかさも
彼にまさるものはない」

と、評されました。釈尊は、人それぞれの本性と因縁を見抜いて、懇ろ、適切に、
教える労を惜しまれなかつた。その広大な慈悲と智慧のはたらきの一端を垣間見
る思いです。



13. だから私は好きなのです

Kammakāmā analasā
kammaseṭṭhassa kārakā
rāgam dosam pajahanti
tena me samanā piyā. (275)

Rohinī

(お父さま)

修行に励み怠らず

殊勝に生きる修行者は
貪り瞋りを捨ててます
だから私は好きなのです (275)

ローヒニー長老尼

ロービニーはベーサリーの町の裕福なバラモンの家に生れた幸せな娘でした
が、ある時、遊行の途次に立ち寄られた釈尊の説法を聞いて心淨まり、その場で
預流果（さとりに向う流れに乗った境地）の悟りを得ました。

以後、彼女は篤くブッダと教団に淨信を捧げ、毎晩「修道の人よ」と言つて眠
りにつき、毎朝「修道の人よ」と言つて覚め、日々多くの食物や飲み物を修道者
に供養しました。

ある日、父のバラモンは愛しい娘にたづねました。

「ロービニーよ、どうしてそのように修道者を愛するのか。彼らは働かず、怠
け者で、他者からの施しで生き、物を欲しがり、美味を喜ぶ。それなのに、ど
うしてそなたは修道者を好むのか」

娘は答えて

「ああ、お父さま。よく訊ねて下さいました」

と、冒頭の偈につづき、更に十ヶ条をあげるのでした。

清らかな行いをする人たちは、三毒（貪・瞋・痴）の惡の根本を滅し、あ

らゆる悪を捨てています。

だから私は好きなのです。 (276)

彼らの三業（身・口・意）による行いは清らかです。

だから私は好きなのです。 (277)

彼らは穢れを離れ、真珠貝のように内も外も清浄で、純白の徳性にみちています。

だから私は好きなのです。 (278)

彼らは学識者、真理の教えを保つ人、聖者、真理に生きる人たちであつて、目的と真理を説き明かしています。

だから私は好きなのです。 (279)

その彼らは、心を統一して瞑想する人、心を落ちつけている人たちです。

だから私は好きなのです。 (280)

彼らは遠く行く人、正しく思念する人、寡黙の人、そわつかない人たちで、苦の終滅を知っています。

だから私は好きなのです。 (281)

彼らは托鉢を終えて村から出るとき、何物をも手に入れたいと探すことをせず、又望まずに去ります。

だから私は好きなのです。 (282)

彼らはいかなる場所にも物を貯えず、戒律に背かず完全に調理された食物のみを求めます。

だから私は好きなのです。 (283)

彼らは、お金も、金銀も手にせず、ただ施されたもので生きます。

だから私は好きなのです。(284)

彼らは、さまざまな家庭、いろいろな地方からやつて来て出家し、しかも互いに睦み合っています。

だから私は好きなのです。(285)

父のバラモンは言いました。

「ああ、ローヒニー、そなたは私たちの為にこの家に生れた。そなたは三宝（仏・法・僧）に対して篤い敬いを持ち、修道者は 無上の福田^{ふくでん}（註①）であると信じている」

「お父さま、もし苦を恐れ厭われるならば、三宝に帰依し、戒を保ちなさいませ。きっとお父さまのお為になりますよ」

「私は、三宝に帰依し、戒を保とう、私の幸せの為に。これまで私は、ただ生れによつてバラモンであつたが、今や真のバラモン、博学な真のヴェーダ学者、眞の沐浴者である」

愛娘ローヒニーは出家し、やがて長老尼となりました。この一聯の父娘の対話は、期せずしてブッダの息吹さえ感ぜられる最初期のサンガ（教団）を彷彿とさせるものがあります。だから、私も好きなのです。

最後に、托鉢について釈尊が示された偈をガータご紹介しましょう。

色も香り損なはず

味のみ取りて蜜蜂の

飛びて花から去る如く

聖者は村落じらを行けよかし

ダンマパダ（49）

何一つ損なうことなく蜂の飛び去った後の花が、蜂のおかげで結実するように、何一つ損なうことなくいつも立ち去る修道者の余薰に、村落じらは、やがて第一、第二、第三のローヒニー長老尼を生んだことでしょう。

福德を生み出す田という意味。淨らかな心で、ブッダとその教団に布施すれば、自然と幸せを得ることが今も出来る。

これは体験的なもので理屈などではない。捧げる側の淨信と、受ける側の淨らかさこそが大切である。

尚、この項の執筆に当つては、格別多く、故中村 元博士の各種ご執筆のお力をかりました。とりわけパーリ語以前の古語の格変化についてお示しいただいたことは深謝に堪えません。

13.だから私は好きなのです





14. 不死の鼓

Vandanaṁ dāni vajjāsi
lokanātham anuttaram
padakkhiṇañ ca katvāna
ādiseyyāsi dakkhiṇam. (307)

Cāpā

この世の無上の主なる
ブッダのみ足に頭面つけ
右繞三匝(註①) 拝をなし
わが供物をば捧げかし(307)

チャーバー長老尼

バンカハーラ国の獵師の長の娘チャーパーは、アージーヴィカ教（註②）の道士ウパカと結婚し、二人は若くして宗教者の群れの長として、杖を執り、村から村へ、町から都へと辿る暮らしを続けていましたが、やがてウパカの生れ故郷ナーラー村に獵師として棲みつき、一人子をもうけました。

ちょうどその頃、釈尊はブッダガヤーのアシュバタ樹（菩提樹）のもとで正覚を成せられ、そのまま七日の間、アシュバタ樹のもとで悟りの境地を味われました。

やがて立つて、前方のアジャパーラ^{ようじら}榕樹のもとで更に七日間、そして更にムチヤリンド樹のもとでは七日間の嵐を、ムチャリンド龍王に擁護されつつ過ごされるなど、七日ごとに宝座をうつして悟りの境地を味わいつつ、その間に、或いは傲慢バラモンと問答されたり、遠国からやって来た二人の商人から、麦菓子と蜜団子の供養をうけられるなど、僅かに世間とのかかわりを保ちながら、しかも胸中では悟りの境地の余りの素晴らしさに、このまま涅槃に入るのが一番自分にとつてふさわしいのではないかと思われたりした最後に、梵天の勧請を容れて、一転、真理の開示を決意され、ベナレスに向う街道に決然と第一歩を踏み出されたのでした。

因みに、ガヤーからベナレスまでは直線距離で約二六〇キロ。現在でも新特急で三時間半かかります。

同じ時、ウパカは同じ街道を、ベナレス方向からガヤーに向けて歩いていました。彼が棲むナーラー村は、ガヤーに程近かつたといいます。

ある伝によれば、それはベナレスから十四ヨージャナほど離れた辺りで起つた出来事だといいますが、もともとヨージャナという古代インドの里程の算出はいろいろな説があるようです。

一説にしたがえば、大体ベナレスから二〇〇キロほど隔たった辺りということになりますから、大分ガヤーに近い所になりましょう。とにかくその辺りで、ウパカは何とも尊い相好の修行者が光に満ちて前方から近づいて来るのに出逢い、思わず声をかけてしました。

「あなたのご様子は素晴らしい。あなたの師はどなたですか」

するとこのような答えが返つて来ました。

「私は無師独悟して、悪しき性を克服した勝者です」
ジナ

「何処へ、何をしに行かれるのですか」

「カーシーの町（ベナレス）に行き、闇の世に不死の鼓を打とうと思います」
それを聞いたウパカは、

「或いはそうかも知れない」

と、首を振り脇道をとつて行つてしましました。

後世、アショーカ王は碑を建ててその地点を記念したといいますが、今はそこ
を知る由もありません。

さて、村に帰ったウパカの胸に、ブッダの言葉がじわじわと溢れつづけました。
「ああ、この自分は何だろう。かつての道士は狩人になり、村の女達に心誘わ
れ、チャーバーとは口争い。欲望の恐ろしい泥沼から脱け出られない。ああ
私は、このナーラー村を去ろう」

と。

妻のチャーバーは、身を飾り、二人の間の子供をわざとうちのめしてまで、黒
い瞳のウパカ（カラ）の心をつなぎとめようとしたが、ウパカは、

「むかし私達は、眞の修行者でもないのに 修行者と思い込み、村々、町々を
経めぐつた。しかし今、かの尊き師ブッダが、ネーランジャナー河のほとり
で真理を説いておられるという。私はその許に行きたいのだ」

と、固い決意を告げ、チャーパーも今は素直に理解して、

「尊いブッダに最上の礼をして、私に代つてこれを捧げして下さい」と、去り行く夫にブッダへの供物を託したのでした。

チャーパーはのちに自分も出家して、遂に長老尼となり、かつての夫のことを、「カーラは、ネーランジャナー河畔に向つて去り、ブッダが不死の鼓を打たれるのを聞きました。それは、四諦、八聖道の真理です。彼はブッダのみ足を頂き、右繞三匝して、このチャーパーのために敬意を捧げてから出家し、やがて三種の明知に達して、ブッダの教えを体得したのです」と、語っています。

註

①右繞三匝
うじょうさんそう

古代インドの最高の礼法。敬意の対象に右肩をむけ、時計回りに三度めぐる。

釈尊も、菩提樹の樹神に敬意を表して、右繞三匝してから、正覚の座につかれたという。

②アージーヴィカ教

六師外道の一人マッカリ・ゴーサーラが唱えた一種の無因宿命論。

仏典には「邪命外道」の名でしばしば登場する。



15. 安穩の道

Kāmesv ādīnavam̄ disvā
nekkhummam̄ daṭhakhemato
sā pabbajim̄ Rājaghe
agārasmā anagāriyam. (226)

Uppalavaṇṇā

欲に煩いあるを知り

安穩出離の道を見て

王舎城にて出家なし

家なき生活に

我れ入りぬ(226)

ウッパラヴァンナー長老尼

よほど美しかったのでしょう。人々からウツパラヴァンナーと呼ばれた一人の佳人がありました。

蓮のなかでも一番美しいと言われる青蓮華（ウツバラ）のような容色（ヴァンナー）ということで、日本でも昔から蓮華色比丘尼の名で知られています。

西方のよき都ウツジエニーに生れ、若い時に見染められるままに嫁ぎ、一人児をもうけますが、不幸にも、夫と実の母の不倫を見ました。

彼女は一人の男性を母娘で共有するおぞましさにわななきながら、よく耐えて、幼な子が八歳になるのを待つて出奔します。

さすらい着いたガンジス河中流の都市ベナレスで、町の富商に助けられ、彼女の美貌に驚いた富商は、ちょうど妻を亡くして居たので早速求婚し、二人は幸せな結婚生活に入ったのでした。

ところが、八年がすぎた頃、夫は商用でウツジエニーに旅し、長い逗留ののち、何と若い少女を第二夫人として伴い帰りました。

ウツパラヴァンナーは第一夫人の寛容を示して少女を同じ屋敷に迎え入れ、優

しく面倒をみていました。

そんな或る日、少女の後ろに立つてその髪を梳いていた時、かつて自分がウツジエーニーに残して來た幼な子の頭をあやまつて傷つけてしまつたその傷跡を見つけ、この少女が実の我が子であることを知りました。

再び一人の男性を実の母娘が共有するおぞましさにわなないた彼女は再び出奔し、さすらいの涯て、マガダの都、王舎城に辿りつきました。

そこには竹林精舎があり、運よくブッダが御滞在中でした。

彼女はその姿の尊さに一眼で帰依し、釈尊は彼女を憐れんで、施論、戒論にはじまり、欲の苦しみ、その超克の悦び、修行、解脱と次第を逐つて法を説かれ、素直な彼女は、その場で心净まつて悟りに達し、出家を願い出て許されました。

冒頭の一偈はその消息を語っています。

出家後の彼女の修行ぶりは目ざましく、程なく最高のアラカン果を得て、比丘尼中神通第一と釈尊から折紙をいただく程の長老尼となりました。

やがて彼女は、コーサラの都、舍衛城の郊外、祇園精舎の背後にひろがるアンダヴァアナ（暗闇の森）の中に粗末な庵を結んで瞑想に専念しますが、ここでもその美貌が禍し、かねて思いを寄せていた幼馴染の暴行をうけるという不幸に見舞われました。

彼女は早速事の始終を釈尊に申上げ、釈尊は問答吟味の上、彼女を容れられます。しかしこの事は教団の大きな話題となり、或る会堂に集つた比丘たちが、いろいろこれについて論議している所に釈尊が姿を現され、次の偈を吟んで彼女の清淨を証明し、且つ比丘たちを教導されたといいます。

蓮の葉の 露の如くに
錐先の 芥子の如くに
愛染に 染まらずあるを
聖者と 我は呼ぶなり

『ダンマパダ』(40)

神通第一と呼ばれた彼女には、こんな逸話もあります。

釈尊教化の事蹟は大体がガンジス河の中流域にありますが、只一つ、遠く離れ、アグラからやや北東を目指して三時間以上も走りつづけるサンカッサ（註①）に、三道の宝階の遺蹟があります。

祇園精舎から忉利天（とうりてん）に昇つて三か月を過された釈尊が、左右に梵天・帝釈を従えて降り立たれた故地といわれ、その時、誰よりも早くそれを感知して、お出迎えのためにこの地に馳せ参じたのは、神通第一のウツバラヴァンナー長老尼であったと伝えられているのです。

このように傑出した彼女は人々に慕われ、また後進の支えでもありましたが、デーヴァダッタ（註②）に害されて、苦しみあえぎつつ尼僧の教団に辿りつき、「私の入滅の時が来ました。皆さんさようなら。怠らず修行に励んで下さい」と言い残して息絶えたといいます。

余り美しきが故に、人に倍する人生の酸苦をなめながら、自ら美しい心を育てることに専念して、尊い最期を完うした、一人の女人の物語です。

註

①サンカッサ（梵 サンカシャ）

釈尊は生後七日目に亡くなつた母マーヤー夫人に法を説かれるために切利天カトリエン（三十三天）に昇り、三か月の後、三道の宝階を下つてこの地に降りたといいます。

②デーヴアダッタ（提婆達多）

デーヴアダッタは釈尊の従弟で、出家して釈尊の弟子となりましたが、釈尊を傷つけようとしたり、また教団の護持者であつたビンビサーラ王の息子、アジャータサットー（阿闍世）を唆し父王を殺させるなどし、その罪で無間地獄に墮ちたと伝えられています。



16. 灯の消えた時

Tato dīpaṁ gahetvāna vihāraṁ pāvisim̄ ahaṁ^{ともしひ}
seyyam̄ olokayitvāna mañcakamhi upāvisim̄. (115)

Tato sūciṁ gahetvāna vat̄tīm̄ okassayām' ahaṁ
padīpasseva nibbānam̄ vimokkho ahu cetaso. (116)

Paṭācārā

灯を手に室に入り
臥所見渡し近づきぬ
針を手にとり芯を下げ
灯の消えし時 そのように
我のこころも解脱せり (115·116)

パター・チャーラー長老尼

「あしたになれば私の婚礼。どうか今夜のうちに私を連れて逃げておくれ」

サーバッティの富商の娘パター・チャーラーは、かねて心を通わせる下男にこうかき口説き、二人は手に手をとつて縁故の村へ駆け落ちしました。

楽しい新婚の日々のうちやがて妊つた彼女は、実家に帰つてお産をしようと旅立ちますが、途中、街道上ではじめての子を生み落とします。

親子三人水入らずの数年が過ぎ、再び妊つた彼女は、又もや実家に帰つてお産をしたいと、幼い長男の手をひいて夫と共に街道を行くうち、酷い嵐に見舞われます。

嵐の中で産気づいた彼女を守ろうとした夫は、毒蛇に蛟まれて一瞬に命を失い、幼児おさなこと、今、生み落としたばかりの嬰兒みどりこを抱えた彼女は、尚もサーバッティの実家を目指して歩むうち、昨日の雨で増水した川に行き当たります。

一度に二児を抱えるのは無理だからと、彼女が一人づつ別々に川の両岸に置いて順次渡そうとしているうちに、嬰兒は鷹にさらわれてしまい、幼児は母を慕つて河に落ち、濁流に呑まれて消えました。

それでも彼女は尚もサーバッティの実家を目指して歩きつづけましたが、いつ

の間にか讃言のようにこんなつぶやきをくり返すようになりました。

二人の子供は死んじゃつた

夫も旅に亡くなつた――

やがて都を流れるアチラバティー河近くまで辿りつきましたが、ここでも河は凄まじく増水していました。

そして彼女はここで再び怖しい話を聞くことになります。

豪壮な実家の建物は前夜の嵐に全壊し、眼前三筋の煙は、懐かしい父と、母と、弟の三人が荼毘だひに付される煙であるというのです。

放心した彼女は、そのまま街にさよい出ました。

二人の子供は死んじゃつた

夫も旅に亡くなつた

父さま母さま弟は

一緒に火葬にされちゃつた——

衣服の脱け落ちるのも知らず、裸身の彼女は、ふらふらと南の城門を抜け、しばしの道を東に辿つていつの間にか祇園精舎の門前に来かかると、運よくもそこでは釈尊説法の最中で、異様な姿の彼女の闖入（ちんにゅう）をおしとどめようとした人々を「好きなようにさせるがよい」

と制されたブッダは、

「妹よ、落ち着きなさい」

と声をかけられ、その一言で心がしづまつたパターーチャーラーは、ブッダの傍にうずくまり、心優しい誰かが自分の上着を投げてくれると、彼女はそれをまとつてブッダの前に五体投地（ごたいとうち）し、事の始終を申し上げました。

ブッダは懇ろに

「心配しなくともよい。そなたは今、一時に肉親を失つて嘆いているが、遠い過去世から今世まで、愛するものを失つて流した涙は、四大海の水より多いのだ。そしてやがてそなたも、そのようにしてこの世を去つて行くものの一

人なのだ。賢者はこの道を悟り、清らかに心を育てて、究極の道を目指して生きるのである」

と、さとされ、その場で預流果（悟りに向かう流れに乗った境地）の悟りを得た彼女は、出家を願い出て許され尼僧院に入りました。その後の彼女は、戒行を完全に守り、怠らず、高ぶらず、ブッダの教えの実践に励んで、遂に長老尼の境涯を得、その顛末を冒頭の偈に謳い残しています。

又、釈尊がその悟りを証明された偈といわれるものも残っています。

もし生滅の理を知らず

たとえ百年生くるとも

五蘊生滅（註）の理を知りて

一日生くるぞまさりたれ

ダンマパダ（113）

彼女は後進の指導にも熱心で、長老尼の境地にまで導かれたウツタマーや、チヤンダー等の名も残っていますし、三十人の尼僧を一夜で悟らせたとか、子供を亡くした五百の女性を導いて、苦しみの胸の矢を抜いたとか、影響力の強い人であつたようです。余談ながら、私も毎晩、粗末な白木のベッドを見て近づき、手をのばし、枕許のスタンドのスイッチに触れ、廻し、明りが消えると、「お休みなさい。パターーチャーラーさま」と心に言つて、闇の中で手をもどします。一日の中で、一番大好きな一瞬です。

註

五蘊
生滅

「生命とは何か」との質問に対する釈尊の答えが、「蘊」(集りの意)。色・受・想・行・識の五構成要素が、瞬間々々、変化生滅しつづける現象は、ヴィバッサナー瞑想によつてのみ観察される。



からし 17. 芥子つぶの真実

Bhajitabbā sappurisā paññā tathā pavaddhati bhajantānam
bhajamāno sappurise sabbehi pi dukkhehi mucceyya. (214)
Dukkhañ ca vijāneyya dukkhassa ca samudayam
nirodhañ ca atthaṅgikam maggam cattāri ariyasaccāni. (215)

Kisāgotamī

人、善きよ
善き友あらば智慧を増す
睦むべし

「生滅四諦」の理を知りて
「八正道」を了知せよ(214・215)

キサー・ゴータミー長老尼

コーサラの都、舍衛城の街に、キサー・ゴータミー（お瘦せのゴータミー）と呼ばれる娘がありました。

好運にも身分違いの家に貰われ、夫にも愛されて、幸せの中に男の子を生みましたが、気の毒にも可愛い盛りにその子はふと亡くなりました。

動転した彼女は亡き子を抱いて

「どうかこの子に薬を下さい」

と、果てなく巷ちまたをさまよいますが、誰も

「死んだ子に飲ませる薬があろうか」

と、相手になつてくれなかつた中で、たつた一人、そんな彼女を憐れんで、

「祇園精舎のお釈迦さまにお願いしてみたら」

と言つてくれた人があり、そのお陰で釈尊にまみえた彼女に、

「街に行つて、誰も死んだ人のいない家から白芥子シダツタを数粒もらつてきなさい」

という釈尊の慈悲のはからいで、やがて無常の理を自然にみずから悟ることになります。その時、釈尊が彼女に説かれたという教える詩（ガーター・偈）が今も残っています。

子らや家畜に愛著し

それに執する人を實に

死王は攫う洪水が

眠れる村を流すごと

『ダンマパダ』(28)

こうして比丘尼サンガに投じた彼女は、眞面目に、熱心に修行に取組み、祇園精舎の背後のアンダヴァナ（暗闇の森・P 97 参照）の森深く、日々瞑想に励んで年を重ねました。

心境は深まり、すぐれた境地が現れようとして、ふと横から、マーラ（魔神）の影がさしました。

子を失いて泣き濡れて

独り林にとどまるは
仇し男を求むるか

ゴータミーは決然として応えます。

子を失いしも遠き日ぞ

などて男に用やある

泣かず 嘆かず、懼れなし

見よわが生の清らかさ

マーラは破れて力なく去り、彼女は更に深い禪定に入ります。そんな彼女を励まして、次のような教える詩を釈尊は説かれたといいます。

たとえ百年生くるとも

不死の境アマタを知らざれば

不死の境を知悉して

一日生きんぞまさりたれ

『ダンマパダ』(114)

これを聞いてゴータミーは、その場で聖者アラカの悟りを得、長老尼と敬われる人になりました。

それでも尚、墓場などに捨てられた布裂れを拾い集めて衣とすることは出家修行者の徳の一つであるとされる戒を固く守り続けて、釈尊から「粗衣第一」のほめ言葉を贈られつつ破れ衣をまとい通しました。

そんな彼女を見て釈尊が吟さまれたという偈が残っています。

ぼろ衣えをまとい いと瘦せて

血の管浮かび 森深く

ただひとり坐す禪定者

そを聖者パラモンと我は呼ぶ

『ダンマパダ』(396)

註 「テーリー・ガーター」には、キーサー・ゴータミーの名で十一の偈が載つて居ますが、内容的には多少の混乱もみられる中で、はじめの一偈の意味するところを合_{スジ}して冒頭一句の訳詩として掲

げました。

この芥子粒の話は、昔から日本でもよく知られていますが、必ずしもその全容と真実が語られているとは申せません。

山口県下松市の基督教寺（真宗大谷派）の御住職、文学博士藤本慈照師は、これについて實に懇切な解説を、月刊の寺報誌上で檀信徒の為に説いて居られますので、是非御一読をお勧めしたく、御希望の方には住職のご了承を得てコピーをお送りいたします（無料）。

御希望の方は左記宛てお申し込み下さい。

〒114-0021 東京都北区岸町一丁目十五一一十九（TEL & FAX 03-3908-3836）

江原通子



18. 老いの日に

Sā me dhammam adesesi
khandhāyatana dhātuyo
tassā dhammām sunītvāna
kese chetvāna pabbajim. (103)

Sonā

尊き尼僧説き給う

五蘊うん 十二處 十八界(註1)

尊き教え身にうけて

われ髪を切り出家しぬ(103)

ソーナー長老尼

よくは分りませんが、ソーナーは舍衛城の町の中流家庭の主婦で、子供が十人いたとも、十四人だったとも言われ、人々からバフブティカー（子沢山の人・子福者）と呼ばれていました。やがて年老いて、これもよく分りませんが、夫に先立たれたとも、夫がすべてを捨てて遊行の境涯に入つたとも言います。

インドでは、ひとたび出家の境涯に入る時は、家族とも縁を切り、財産も放棄するのが伝統的なならわしでした。

修行はもうそこからはじまつて いるわけです。

とにかく家に残つたソーナーは、全財産を握つていきましたが、暫くすると、すでに独立してそれぞれ家庭を持つて いる子供たちから、父の財産を分けてほしいという申し入れが出され、話し合いの末、結局、彼女は子供たちに平等に夫の財産を分け与え、自分は何物もとらず、長男の家に身を寄せるこ とにしました。

ところが、暫く一緒に暮らすうち、長男のお嫁さんが言いました。

「お母さま、お母さまは私たち兄弟に公平にお父さまの財産を分けて下さいました。でも結果として、お母さまのご面倒を見るのは、長男であるうちの人

ひとりだけですのよね」

ソーナーは段々長男の家に居辛くなり、次男の家に遷ることにしました。ところが、暫く一緒に暮らすうち、次男のお嫁さんが言いました。

「兄弟みんな公平にお父さまの財産を分けていただきましたのに、結局、お母さまのご面倒を見るのは、次男であるうちの人ひとりだけですのよね」

ソーナーは次男の家にも居辛くなり、やがて転々と子供たちの家をたらい廻しにされて行くうちに、身も心も疲れはててしまい、最後に倒れ込むように仏教の尼僧院の門を叩きました。

尼僧の長おさは彼女に向つて、「私は誰?」という問題を提起し、今の今まで

私の夫、夫の財産、私の子供、私の嫁、

私の悲しみ、私の愁い、私の迷い、

私の行末、私の不安、私の苦しみ、

私は、私が、私の、私に、私を……

と苦しんだその「私」に、実体はないことを悟ったソーナーは、見習い尼の時、

すでに過去世を知る淨らかな能力（天眼）を得たといいます。

ソーナーは、たいていの人は若い時から修行しているのに、自分は年老いてから出家だからと、何事も控え目に、若い人を蔭から手助けして雑用もいとわず、一方、修行にかけては人一倍努力し日夜に励み、寝る間も惜しんで瞑想に専念する彼女は、くら闇の中で坐禪するために、高殿の床下の柱の在処を手探りで覚えたり、立木を一本一本手探りで伝いながら歩行禪に励んだり、いつしか修行仲間から「努力家のソーナー」と呼ばれるようになりました。

釈尊もその志を憐れまれて、

「勤勉努力するもののうちで、ソーナーは第一位である」

と稱揚され、

たとえ^{もとじせ}百年生くるとも
無上の法を知らざれば
無上の法をよく知りて

ひと日生くるに及ばざる

ダンマパダ（115）

と、励まされ、その偈を聞いた時、ソーナーは最上のアラカン果の悟りを得、私はもう再び生れることはないと宣言します。

毎年、秋が近づくと、私はソーナー長老尼のことが思われてなりません。おそらく九月には「敬老の日」があり、自分も亦、改めて「老い」と思うからなのでしょう。

「老い」について釈尊は、次のようにシビアな一句を吐いておられます。

髪白しとて長老と

世の敬いは受けられず

よわい
齢空しく老いぬれば

人呼んで言う「ただの老いばれ」

註

ダンマパダ (260)

存在の把握（私は誰？）——五蘊・十二處・十八界——

〔五蘊〕

色 = 色にとらわれ苦が生れる

受 = 私は見た、聞いた……という自己意識の元凶

想 = 滴の如く流れる。が、私ではない

行 = 何とかせねばの心のエネルギー。滴の如く流れる。これが私か……

識 = 知ること 考えること 生きること

〔六根〕

眼・耳・鼻・舌・身・意

〔十二處〕

十八界

存在の把握（私は誰？）

〔六境〕

色・声・香・味・触・法

〔六識〕

見・聞・嗅・味・触・知



19. いとしのジーヴァー

Amma Jīvā ti vanamhi kandasi attānam
adhigaccha Ubbiri.
cūlāsītisahassāni sabbā Jīvasanāmikā
etamh' ālāhane daḍḍhā tāsam
kam anusocasi. (51)

Ubbiri

ブッダは云われた。

ああジーヴァーと森なかで
泣きつつ叫ぶウッビリー
あなた自身を知りなさい
同じその名で呼ばれつ
この森なかに荼毘だひされし
八万四千のジーヴァーあり
そのいづれをか嘆くなる(51)

ウッビリー長老尼

ウツビリーは稀に見る美しい少女だったといいます。コーラサラの都・舍衛城の裕かな家庭に生まれ育ち、何かの折に国王の眼にとまり、その美貌に驚いた王に望まれて後宮に入りましたが、やがて世にも愛らしい姫が生まれると、王の悦びは限りもなく、遂にウツビリーを皇后の位につけるほどの溺愛を示しました。

しかしその悦びもつかの間、国王夫妻がジーヴァーと名づけて掌中の珠といつくしんだ姫は、可愛い盛りに、ふと、かき消すように幼い命をおえました。国王夫妻の嘆きはたとえようもなく、わけても母親であるウツビリー皇后は、ただただ泣き崩れて心もうつろに、いとし子の名を呼びつつ、荼毘だひに付した森のあたりを、昨日も今日もさ迷いつづけました。

舍衛城の都の東郊にはアチラヴァアティーという川が流れて居り、その川辺につづく深い森の中に、当時の都の人たちの火葬が行われる場所があつたのだと言います。

嘆きの母は、今日も嘆きの森をさ迷い果て、嘆きの森を出て、嘆きの川辺へとさ迷い入りました。天地一切が嘆きの色に見えました。

いつそ嘆きの水に身を投げたらと、必ず思つたことでしょう。子を失つた母だけが知る心情でした——。

その時、ふと人の声がしました。

「女人よ、何を泣くのか」

顔を上げると、我が前に、釈尊その人が立つておられました。

「亡き子ジーヴァーを悼んで泣いております」

ブッダはたたみかけて、

「この火葬場で荼毘だひされた、ジーヴァーという名のあなたの娘は、八万四千人いた。そのうち、どのジーヴァーを悼んで泣くのか」

釈尊は、ジーヴァーという幼い女の子が荼毘だひに付されたという辺りを、

「ほら、ここでも」

「ほら、あそこでも」

と、一つひとつ指し示され、ウツビリーにも次第にそれが見えて來たといいます。

これから先は、私には書くことが出来ません。しかし、ただ書けませんと済ますことも出来ませんので、もし、出来ましたら、前出（7）「前世」というもの

を、もう一度読み返してみていただきたいと思います。(P 44)

そこでは度重なる結婚の失敗の果て出家したイシダーシー長老尼が、「私は出家して七日目に三種の明智を得、自分の過去七世を知りました」と、語っています。

ここにいう三種の明智とは、宿住智(しゆくじゆうち)、天眼智(てんげんち)、漏尽智(ろじんち)の三つをいい、開悟の前提には必ずこの三種の清らかな智慧が現れるといわれています。

そのうちの宿住智(しゆくじゆうち)とは、自分と他者の前世を知ることの出来る能力だと理解していただきたいと思います。

こうした淨らかな智慧の獲得は、前述のイシダーシー長老尼のように、出家して七日目に得たという人もあり、「私は三日目に得た」という詩を残す人もあります。

「二十数年努力しても所期の目的を果たせなかつたので、死のうと思つて山に入つた。そしてその最後の瞬間に解つた」

と語る人もある中で、ウツビリー皇后は、余程因縁が熟していたのでしよう、一

人の尊い聖者を篤く供養した好因縁によつて富裕な家の娘として生れ、幾度か美しい皇后の位にものぼり、ジーヴァーと名づける愛児にも恵まれながら、やがてその子を荼毘に付さなければならなかつた自分の、限りない過去世の幾千万生を明らかに知つたといいます。

ブッダから「あなた自身を知りなさい」と云われた彼女は、そのように確かに、明らかに、自分自身を知つたのでした。

ウツビリーはブッダに答えます。

ああわが胸を貫ける

見難き矢をば抜き給い

憂いに沈む我がために

死児への嘆き除かれぬ（52）

こころの矢をば抜きとられ
我は欲なく円なり^{まどか}

尊きブッダとその法と

修行の集いに帰命せん（53）

若く美しい皇后は、一切を捨てて比丘尼の教団に投じ、ウツビリ一長老尼と敬われる人になりました。

註

釈尊は云われたといいます。

「常人には、輪廻のことを正しく理解するのは難しいのです。余り考えすぎると、却つて害になります。それよりも、忠実に三帰依と五戒を守り、互いに幸せな日々を心掛けてお暮らしなさい」と。



20. 来よ、バッダー

Divāvihārā nikkhamma Gijjhakūṭamhi pabbate
addasam̄ virajam̄ buddham̄ bhikkhusaṅghapurakkhatam̄. (108)
Nihacca jānum̄ vanditvā saṃmukhā pañjaliahām̄
ehi Bhaddhe ti avaca sā me ās' ūpasampadā. (109)

Bhaddā purāṇaniganṭhī

み弟子らあとに従えて
靈鷲山の御仏は
「来よ、バッダー」と喚し給う
わがまどらかな受戒なり(108·109)

(もとニガンタの徒の)バッダー長老尼

バッダーは深窓育ちの我侭娘わがまめでした。或る日、侍女たちにかしづかれながらバルコニーから王舎城の街を眺めていると、盜賊の首かしらが今しも刑場に曳かれて行く姿が目に入りました。彼の名はサットウカ。まだ若く、はつとする程の美男子でした。一目で恋におちたバッダーは、

「ああ、あの人と添えないのなら、いつそ死んでしまった方がましだ」と、ベッドに泣き伏し、足をばたつかせてもだえました。

娘の言うことは何でも聞く父親は、大金で役人を買収し、サットウカを貰い上げ、香水こうすいに沐浴もくよくさせて晴着を着せ、ひそかに娘の部屋に送りました。

異様な蜜月のなかでサットウカは言います。

「ねえバッダー、外の城壁（註①）のはずれの崖の上の小さな祠ほこらを知っているだろう。私は囚われていた時、あの神さまに願がんをかけたのだ。もし、自由な身にして下さったら、沢山の捧げ物をしますとね。だから、お前と二人で御礼詣りをしたいのだ」

バッダーはいそいそと供物をととのえ、美しく着飾つて、多くのともお供ともを従え、二人乗りの馬車に夫と並んで坐つて、城壁のはずれまで来ましたが、お供はここ

で待たせよと云う夫の言葉に従つて、二人だけで山道を登り、崖の上の祠につくと、夫は急に豹変して、

「バッダー、上衣を脱いで、身につけている宝石とアクセサリーを全部一つにくるんでそこに置け」

と命じました。

一瞬にして夫の本性を見抜いたバッダーは、云われるままに従うと見せて、「宝石も、アクセサリーも、みんな貴男のものよ。そしてこの私も、あなたのもの！」

と、前から縋り、後から縋ると見せて、崖の上からサットウカを力一杯つき落しました。

一瞬にして夫殺しの罪を背負つたバッダーは、そのままジャイナ教の尼僧團に投じ、親切な尼僧たちは、よつてたかつて、バッダーの髪の毛をむしりとつてくれました。

ただの剃髪ていはつより功德が大きいと、ジャイナ教では信じられていました。

バッダーはよく痛みに耐えましたが、むしりとられた後にクルクルした巻き毛

が生えて来て、「バッダー・クンララケーサー（巻き毛のバッダー）と呼ばれるようになりました。

生来利澁な彼女は、忽ち教団の中で頭角を現し、女性論客として各地を遍歴、どこでも街の入口に土盛りしてジャンプの枝をつき立て近所の子供たちに、「バッダーに論戦をいどむ者は、この枝を踏みにじれ」と云つて見張らせました。やがて彼女はコーラサラの都舎衛城に至り、例によつて都の入口にジャンプの枝を立てました。

折から通りかかったブッダの御弟子の筆頭サーリップツタ尊者はこれに気づいて、子供たちから事情を聞き、枝を踏みにじらせ、かくして二人の論戦の幕が切つて落されることになりました。

多くの群衆が見守るなか、二人は互いに礼儀正しく挨拶を交し、サーリップツタ尊者が、

「先ずあなたから」

と、第一声を譲ると、バッダーは矢継ぎ早にありつたけの質問をぶつけ、すべて淀みなく答えた尊者が、最後に

「では、一つだけ、お尋ねしますが一つとは何ですか（註②）」と、問いかけ、うろたえるバッダーの為に懇ろに説法しました。バッダーがひれ伏して、

「あなたに帰依します」

と三拜すると、

「私などに帰依してはなりません。この世で唯一最高に尊い、ブツダにこそ帰依なさい」

とさとして別れ、バッダーは更に遍歴を重ねて故郷の王舎城に辿りついたのでした。

その後の仔細は冒頭の詩に明らかです。

やがてバッダーは、釈尊から「捷慧第一」のほめ言葉をいただく程、尼僧教団代表的七人のうちに数えられ、五十年もの間、マガダ、カーシー、ヴァッジー、コーサラと、ガンジス中流の諸国に行脚して獅子吼を続けました。彼女の肩書に「もとニガンタの徒（ジャイナ教徒）」という言葉がついているところからも仏教に入信以前から余程の女性論客であつたのでしょう。

釈尊は彼女のために次のような偈頌を吟まれたことがあるといいます。

よしなき千の偈頌げじゅうよりも

聞きて心の淨まるる

ただ一行の偈げもあらば（註③）

そが一句こそ勝りたれ

『ダンマパダ』（101）

註

①外の城壁

王舍城は外と内の二重の城壁で護られ、外の城壁のもの淋しい外れに、今も盜賊の崖が残っている。

②一つとは

この場合「すべての生き物は、心と体の為の食べ物によつて生きる」というのが正解とされる。一つ宛数字をふやして行く初学者のための設問。

③ただ一行の偈

偈頌はほとんどの場合、一行八音の四行詩で綴られる。その中のたつた一行（原詩でいえばたつた八母音）（ふくわん）一ことでも、尊いものは尊いの意。筆者の実感もあって、渡辺照宏先生の訳意をいただきました。



21. 二人のスジャーター

Sutvā ca kho mahesissa saccam sampati vijjh'aham
tatth' eva virajam dhammam phusayim amata m padam. (149)

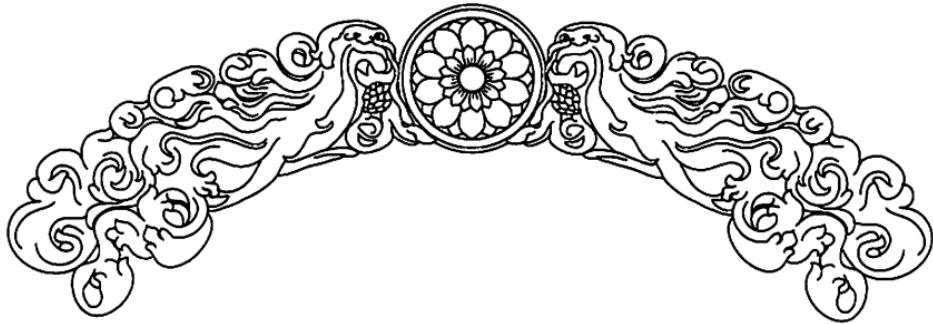
われ麗しく裝いて
薰る栴檀香 佳き華鬘
瓔珞あまた身に飾り

仕えかしづく侍女の群れ

一日 我は硬軟の

食べ物および飲み物を
ほどよく適宜ととのえて
樂しき園を訪れぬ

樂しさ満ちて帰るさに
サーヶータ市のアンジャナの
林に立てる精舎を
ふと目にとめて歩み入る



Tato viññātasaddhammā pabbajim̄ anagāriyam̄
tisso vijjā anuppattā amogham̄ buddhasāsanam̄. (150)

Sujātā.

そこにこの世の灯の
ブッダ在せば拝をなし
近づく我に慈しみ
垂れて法をば説き給う

われはブッダのみ教えを
聞きて真理に通達し
その場をさらずけがれ無き
不死の道を悟りたり

正しき真理の教え知り
われ家を捨て出家なし
三種の明智に通達す
ブッタの教え 虚無ならず

(145)
·
146
·
147
·
148
·
149
·
150)

スジヤーターラニ

サーケータのスジヤーター

サーケータはコーサラ国¹の都舍衛城から南に一日行程の所に栄えた商業都市で、富豪も多かつたようで、そのうちの一家庭で豊かに愛されて育ち、豊かな嫁家に嫁いで夫にも愛され、何の苦労も知らないまま、好因縁により思いがけない果報を得たその長老尼の名はスジヤーター。

それは「善生」と訳され、信じがたい程の果報に恵まれたその生涯に、まことふさわしい名と思われます。

では、同じく幸運に恵まれたスジヤーターを名乗るもう一人の女性のことをお話し致しましょう。

もう一人のスジャーター

もう一人のスジャーターは、ガンジス河を南に越えて、更に数百キロ南下したマガダ国の、ネーランジャナー河のほとり、緑美しいセーナー二村の村長の娘がありました。

いくつかの伝によれば、十人姉妹のうちの一人であつたとも、いや、姉妹二人のうちの一人であつたとも云われますが、ともかく彼女は当時の土地の習慣によつて、一本の身近なニグローダの老樹に願をかけていました。

それは身分にふさわしい結婚をして、よい男の子に恵まれるようにといふ願いでした。ある春の、ヴィサーカ一月の満月の日、彼女は夜明けに起き、心をこめて乳粥を煮、先ず下女のブンナーに、ニグローダ樹の様子を見に行かせると、帰つて来た彼女は

「今日はうちの神さまが樹から降りて、坐つておいでになります」

と報告をしました。

実はそれは、前正覚山中で六年の苦行の末、出山を決意された釈尊が、そこに

坐つておられたのでした。

山中の苦行林から自然に下る山道はゆるやかになだれて、この川沿いの村に達しており、私たちは幸せにも、今でもそれを辿ることが出来ます。

又、別の伝によれば、或る朝

「尊い修行者がこの村に来られるから、ご供養しなさい」

という天神の告げによつて、スジャーテーは心をこめて炊いた乳粥を黄金の鉢に盛り、自ら悦びの極みの中で、光に満ちて坐つておられる釈尊に捧げ

「私の願いが成就いたしましたように、あなたさまのご心願も成就あそばしますように」

と、祝福の言葉をのべたとも言われます。

この施食で体力を調えられた釈尊は、眼前のネーランジャナー河で沐浴され、更に元気を回復されますが、それでも向う岸に上がる時は、一本の岸辺の草

に縋つて漸く前岸の土を踏まれたといいます。

そこは草青く、花咲き、大樹が枝を交すひろやかな土地で、釈尊は中でもことさらやさしく枝繁らせる一本の菩提樹の根元を三たび右廻りに巡り、樹神に三三拜の礼をとつて挨拶されてから、いよいよ正覚の座につかれたのだといいます。

後年、釈尊は回顧して

「あらゆる女性の在家信者のうち、最初に帰依した最上のものは、実にスジャーターであった」

と云われたといいます。

彼女は幸福な結婚をして男の子を生みましたが、のちにその子ヤサは、ブッダに帰依して出家し、スジャーター夫妻は熱心な在家信者を通したと言います。

今、成道の地、ブッダガヤーの大塔から、スジャーターの村には、雨期でも乾期でも容易に行くことが出来ます。

新たに架けられた長い橋を渡り切れば、もうそこはスジャーターの村で、右手

の繁みに入ればすぐにスジャーターの生家跡として村人が大切にしている一劃があり、粥を捧げた乳糜林跡にはジャイナ教徒の手で簡素な小堂が建てられ、インドでは今も、ジャイナ教、ヒンズー教でも尊い聖者の一人として、ブッダ釈尊は深く人々の尊崇を集めていることがよくわかります。

21. 二人のスジャーター





22. 二人のウッタラー

今まで毎回、長老尼方の立派なお悟りのエピソードばかりをご紹介して来ましたので、読者の中には、或いは遠い世界の噂話のように感じておられた方もおいでだつたかも分りません。しかし、仔細に見て行けば、その長老尼方も、みんな、

もと家出娘、むかし夫殺し、前身は駈落妻、かつて物狂いと、どうしようもない人生苦のさなかに、ブツダ釈尊の一語一拶によつて輝く心の世界を掴むことの出来た福德者であつたわけで、もとはみな私達と同じ凡人でした。

そこで、今回と次回の二つの回は、特に在家者として世を生きながら、釈尊の教えを忠実に守つて幸福を見つけた女性について語りたいと思います。

その主人公達は在家ですから、当然『長老尼偈テーリーガーター』には登場しませんが、各人に因んで吟イチヂクまれたと伝えられる釈尊の偈を、併せてご紹介致しましょう。

おちびのウツタラー

インド亜大陸の中央平原で、ヒマラヤ山脈西部から流れ下ったガンジスの水が、今まで並流して来たカグラ河と合流、はじめて洋々たる大河となつて流れ行くあたり、現在のアラハバードに近い所にパーリ語でコーサンビーという町がありました（梵語ではカウシャンビー）。

ここは東西交通と、南北交易の十字路として古来栄えたヴァッタア国の都で、釈尊当時はウデーナ王の治下にありました。

ここより遙か東方のマガダやコーサラを拠点として急速にひろまつた釈尊の教えは、瞬くうちにコーサンビーにも及び、多くの信者が生れ、大きな比丘サンガも出来ました。

ウデーナ王には三人の妃がありましたが、第一、第二の妃は篤く三宝に帰依し、第三の妃だけが、釈尊にプライドを傷つけられたと思い違えて、恨んでいました。

後宮の女性たちは外出も自由には出来ませんでしたが、使い走りの小娘クジユータラー（おちびのウツタラー）だけは、毎日ウデーナ王から銅貨八枚をあずか

り、王妃の花を買うために町に出て、銅貨四枚で花を買って城に持ち帰り、あと四枚は自分のために蓄えていました。

「猫ばば娘」のウツタラーは、その日も町に出て花屋に行きましたが、そこで偶然にも釈尊にお食事を捧げ、説法を聴くという幸運に恵まれ、一ぺんに心淨まつて銅貨八枚全部で花を買って城に帰りました。雇い主の第一王妃が驚いて「いつもの倍もある花を、どうしたの」

とたづねると、ウツタラーは

「み仏のおさとしで、私は一ぺんに心淨まり、真理をさとったのです」と、すべてを語り、妃はよろこんで

「あなたは不死甘露^{アマラ}を飲みました。私たちにものませて下さい」

と、ウツタラーの身を浄め、座を設け、官女が一斉に礼拝して釈尊説法の再現を聞き、以後、ブッダと後宮の唯一のパイプ役になつたウツタラーは、説法のすべてを暗記して皆に伝えました。釈尊も

「私の説法を聞いた女性信者のうちで、一番多く学び、よく説法するものは、おちびのウツタラーである」

と讀められました。

後年、ウデーナ王の後宮に悲劇が起こり、第一、第二の王妃は邪惡な第三王妃に焚殺されますが、おちびのウツタラーだけは、その日も花を買いに町へ出て居て無事だったと伝えられます。

もう一人のウツタラー

王舎城の町はずれで、優しくつましく育ったウツタラーは、福德に恵まれて大富豪の嫁に貰われて行きましたが、婚家の人々の不信心を嘆いて父に言い遣ると、あわれんだ父は

「これで、城中第一の遊女あそびめシマリーを招いて夫の世話をまかせて、お前は雨期の間、聞法と布施行に励みなさい」

と大金を届けてくれました。

こうして招き入れられたシリマーは、すっかり主婦気取りになり、女心の愚か

さから、ウツタラーの妻の座を嫉妬して、折から供養の為の揚げパンをつくりうとしていたウツタラーに、煮え立つ油を杓子ですくつて浴びせかけようとした。

その時、心優しいウツタラーは、

「私はこの人のおかげで聞法・布施が叶った。忿つていらない私がやけどする筈がない」

と、心中深くシリマーを慈心でつつむと、油は彼女を灼かず、流石のシリマーもその優しさに打たれ、謝罪し、翌日この家の食施を受けられた糀尊が、食事をおえられたその足許に、二人並んでひれ伏すと、始終を聞かれた糀尊は、

「ウツタラーよ、みごとであつた」と、次の偈をのべられたといいます。

忿らぬことで 瞞に勝ち
善き行いで 悪に勝ち
施することで 貪に勝ち

眞実で嘘に
まことでうそに
勝てよかし

ダンマパダ（三）

このウツタラーの話を思うたびに、私は成道直前の釈尊を脅かそうと魔王が放つた無数の箭が、みな美しい華箭や天蓋となつて、ブツダのお身の周りを飾り止まつたという伝承を、思い起さずにはいられません。



23. 萎れぬ花

釈尊は四十五年もの間、一処不住、ひたすら真理を説きつづけて旅され、その足跡はガンジス河中流をはさんで南北凡そ三〇〇キロ、東西凡そ四〇〇キロに及ぶといわれます。

勿論まだ統一以前のインドで、何度か申しましたように、ガンジス河の北側に老大国コーサラが、南の新興国マガタと対峙するのを含めて十六の大國があり、その他、中・小の諸国は数え切れぬほどであつたといいます。

釈尊の教化は次第にそれら諸国に及び、多くの出家と、無数の在家信者が育ちました。

中でも男性信者としては、祇園精舎を建てたスダッタ長者。女性ではヴィサーカー夫人の名がよく知られています。

もつとも釈尊は、この二人が余りに突出した富豪であつて、教団の外護者として人の真似の出来ない徹底した布施行を行じていましたから、それをそのまま、在家信者のお手本として、人々に、

「あなた方も見習いなさい」

というようなことは、決して言われなかつたようです。

そしてむしろ、在家婦人のお手本としては、(22)に書きました二人のウツタラー（優しい主婦のウツタラーと、おちびのウツタラー）の名を挙げられ、また、男性信者の規範としては、チッタとハツタカ両青年の名を挙げられ、世の母親たちは我が子にむかつて、

「あなたは、チッタさんか、ハツタカさんのような人になりなさい」

と訓した程でしたが、この二人の青年についてはほとんど私たち日本人は知りませんので是非ご紹介したいのは山々ですが、余りにこの稿の主旨からはずれることがありますので、今は女性傑出信者の一人者、ヴィサーカー夫人について記すにとどめましょう。

当時、マガダの領土の東際を流れるチャンバー河（現チャンダン河）を境に、アンガ国がありました。

ガンジスが網の目のように分流してベンガル湾にそそぐデルタ地帯に位置し

て、良港に恵まれ、海上貿易で栄え、小さいながら由緒深い国でした。当時は新興のマガダに藩属しながらも、都のチャンパー城は昔ながらに賑わって、中でもメンダカ家は筆頭財閥として栄えていました。

その家の孫娘ヴィサーカーは幼い頃、遊行の途次立ち寄られた釈尊にまみえて、子供心に深く帰依の心を起し、祖父と共に熱心に布施行に励みました。

やがて、かぐわしい十六歳の年に、コーサラの都のミガーラ家に嫁ぎます。

夫とも仲睦まじく十人の男の子と、十人の女の子に恵まれて、皆つつがなく育ち、一族は富み栄え、しつかり者の嫁として、ジャイナ教を信奉する男を回心させて幸せな信仰生活を教え、はじめて真の心の解放を味わったミガーラは感謝之余り、嫁のヴィサーカーに対し「我が母シラウト」と呼びかけ、人々はヴィサーカーをミガーラマーテー（ミガーラの母・鹿子母カクシモ）と呼ぶようになりました。

舅のミガーラは感謝の思いを何としても現したいと、ヴィサーカーに、「ブッダとその教団のために、何でもあなたのしたいようにうちの財産を使いなさい」

と言つてくれたので、彼女は悦んで都の東の門を出た郊外にお寺を建て、人々は

東南郊に既にあつたお寺を『祇樹給孤獨園精舍』^{ぎじゅきくおんじょうじや}「祇園精舍・祇陀（ジエータ）太子が園林を提供し、孤独な人々に食を給する長者—須達多長者—が建てた精舍」と呼び、また東門の外にヴィサーカーが建てたお寺を『ミガーラマーター講堂』（鹿子母講堂）と呼んで悦び、ヴィサーカーは講堂の施設から、そこで過す比丘をはじめとする人々の資具に至るまで、すべてに心を碎いて日々の善行に励みました。

また、女性らしい心づかいで多くの美しい花を植えたので、女性たちは『花の寺』とも呼んで親しみました。

当時は月の満ち缺に従い、出家者は一日と十五日の、月に二度集まって、比丘・比丘尼とも夫々数百ヶ條に及ぶ具足戒（成人の出家に授けられる大切な戒律）の各條を合誦して反省し、もし過失があれば一同の前に懺悔するウポーサタ（日本では布薩と呼ばれる）の行事がありました。

これに対し、在家は大体週に一度ほどの割合でお寺に集まり、説法を聞き、瞑想して、通常の五戒に三つの戒を加えた八斎戒を守つて清らかな一日一夜を過すのでした。

こうして清らかな一日一夜をお寺で過すよろこびを、若い女性たちは、「この善根によつて夫にも愛され、よい子にも恵まれますように」

と、励むのに対し、旧婚の女性の中には、

「おかげで、うるさい亭主の顔を見ずに、一日一夜をすごすことの出来る幸せ」と語つて喜ぶ人もあつたといいます。

ヴィサーカーはそれらの人々の世話にも夢中でした。

このように日々の善行に励むヴィサーカーは、或る時、余りの満足感について思わずハミングしてしまいました。

それは当時の貴婦人としてはあり得ぬことだつたらしく、評判になると、釈尊は、

「ヴィサーカーは自分で自分の徳行を悦んでいる。それが思わず声になつたのだ」

と、次のような偈を吟くいさまたとと言います。

堆うずたかき

と。

また

と。

花々縷る　華鬘

生きて死すべき人の世は
萎れぬ徳を縷れかし

ダンマパダ　(53)

華の香は

チヤンダナ・タガラ・マツリカも

風にさからい薰るなし

人の徳こそ吹く風に

さからい四方に薰りゆく

ダンマパダ

(54)



24. 大いなる章

Ādīpitā tiṇukkā gaṇhantam
dahanti n' eva muñcantam
ukkanpamā hi kāmā dahanti
ye te na muñcanti. (507)

Sumedhā

乾草燃える炬火たばこは

それ持つ人の手を焼けど

放せし人の手は焼かず

諸慾も放さぬ人を焼く(507)

スメーダー長老尼

一人の尼僧について一喝ずつの章にはじまり、二つずつの章、三つずつの章と次第にすすんで、最後にスメーダー長老尼の名のもとにまとめられた七十五の悟りの詩について紹介致しましょう。

彼女は、今までしばしば登場した東部インドの、マガダやコーサラから見れば、遙か西方のマンターヴァティーの都で、当時、国を治めていたコンチャ王と第一王妃の間に生れた王女として育ち、長ずるにつれてブッダの教えに深く心をよせ、やがて出離の志を持つようになりました。

彼女は王宮の広間で父母に訴えます。

「お父さま、お母さま、私は生存に対する愛執を滅ぼすために出家したいのです。ブッダが出現されました。いまや幸せな機会に恵まれたのです。私は在家でいる限り、食物を摂らず、死に身を任せましょう」

つまり、出家の希望が叶わなければ、断食して死ぬと云うのです。

父は案じ、母は嘆き、宮殿の床に泣き倒れる彼女をかかえ起こし、

「スメーダーよ、我が子よ。あなたはアニカラツタ王の第一王妃となることに

決まっている身ですよ。出家の道は仲々むずかしい。それよりも望みさえすれば、あの雄々しいアニカラッタ王と共に、財宝、権勢、愛の快樂を思うままに享受しなさい」

スメーダーは泣きながら応えました。

「どうかそのようなことが起こりませんように。生存ははかないものです。私は、出家か、死か、そのどちらかを選んで、結婚はしません」

一方、婚約者のアニカラッタ王は、結婚式のため、大勢の供をつれて現れます。スメーダーは宮殿の扉を閉めて高殿にのぼり、丈なす黒髪を剃刀で切り落とし、第一段階の瞑想に入りました。そして、マニ宝と黄金で身を飾った若き婚約者が宮殿に到着した時、彼女はまさに高殿に在つて無常觀を修しました。王はいそいで宮殿に駆けのぼり、掌を合わせて彼女に呼びかけます。

「ああ、美しいスメーダー。私はあなたに王国を託します。栄華を享けて人々に施しなさい。憂いに沈んではいけません。ご両親は苦しんでおられますよ」スメーダーは、宮殿の窓から、地上に坐つて歎き泣く両親と、婚約者の姿を見てから、彼に応えます。

「どうかお帰り下さい。私自身、この生存に対し、なんの信頼もして居ないのです。不死の甘露があるのに、どうしてあなたは五種の辛味をお求めになるのですか。

この不死の境地は多くの人が悟つたものであり、今日でも正しく専念する者はこれを得ることが出来ます。でも努力せねば得られません」

このように言つて、スメーダーは握つた自分の黒髪の束を高殿から投げ落としました。アニカラッタ王は立ち上がって合掌し、スメーダーの父王に向い、「どうかスメーダーの出家を許して上げて下さい。彼女は解脱と真実を見るでしょう」と、とりなします。

スメーダーは父と母の許しを得て出家し、やがて長老尼の境涯を得、その名のもとに集められた偈頌の数は七十二。彼女の多彩な生涯を物語ります。

それは、おそらく釈尊の最晩年か、ご入滅間もなくにはじまる尼僧物語で、彼女はその時期の尼僧集団の中の一エースだったのではないかという感じが何故か致します。

一人一偈からはじまつて順次に数を逐い、一人七十二偈の「大いなる詩句集」を以て偉大なる『テーリー・ガーター』は終ります。

そこで、七十二偈中、この我々の肉身の醜さ、はかなさをうたつた憂鬱の句の一つが、そのままの形で『ダンマパダ』に収められていますので、それをご紹介して、筆を收めます。

ああ、いつの日かこの我が身

地に倒れ伏し横たわり

五感意識も失せぬれば

丸太の如く捨てられん

ダンマパダ（41）

（完）

後記

安田生命（現・明治安田生命）の創業者安田善次郎翁は、篤信の仏教者として世に尽くされ、東京大学の安田講堂を一寄進で建てられたことでも知られていますが、その精神の継承者で、安田生命の社長であつた竹村吉右衛門氏も亦、透徹した仏教徒として世に奉仕され、戦禍の浅草寺の再建をはじめ、戦後の比叡山の経営の立て直しや荒廃した東洋大学の復興などに尽力されたことは有名です。

氏はまた仏教振興財団を設立して仏教の振興につとめ、易しく親しみやすい仏教布教の月刊小冊子「心の糧」を刊行され、仏教の心の普及につとめ、その余薫は今も尚、後継者に引継がれています。

その「心の糧」の編集部から寄稿を望まれ、日本テーラワーダ仏教協会のアルボムッレ・スマナサーラ大長老におずおずとご相談した時、間髪を容れず、「『テーリー・ガーター』はどうですか。註釈書もありますよ」

と仰言つて下さつた一言で、心がひらけました。有難いことでした。

僅か二十四章を仕上げるのに丸二年かかりましたが、その間、読者の方々のほんの一言のご感想や、短いお励ましの言葉をいただくだけで、どんなに嬉しうございましたことか。又、事務局各位にも数々のお力をいただきました。振り返ると、何もかも感謝の一語に尽きます。有難うございました。

三宝のご加護により、皆さまがお幸せでありますように。

追記

このたび、日本テーラワーダ仏教協会出版部が二年の連載を一冊にまとめてくださることとなり、これ又、思いも及ばぬ多くの法友の蔭のお力をいただくことになりました。何もかも有難いことばかりでございます。

最後に、お經典の心をいただいて、今の感懷の一匁を——

陽は昼に照り

月は夜を照らす

ブッダは一切時、一切処を照らす

最勝なるかな

ブッダ

生きとし生けるものが幸せでありますように

合掌

江原 通子（えはら ゆきこ）

1920年東京に生まれる

東京都立第一高等女学校卒業

東洋大学文学修士課程修了（インド哲学専攻）

(株)文藝春秋社友

大日本茶道学会教授

著書に『私の法句経』『心流抄』『瓔珞をはづすとき』他

テーリー・ガーターに聴くブッダのことば

発行日 2007年1月8日 初版第1刷

著 者 江原通子

発行者 小西淳一

発行所 (宗)日本テーラワーダ仏教協会

所在地 〒151-0072 東京都渋谷区幡ヶ谷1-23-9

電 話 (03) 5738-5526 (代表)

F A X (03) 5738-5527

U R L <http://www.j-theravada.net/>

E-mail gotami@m05.itscom.net

振 替 00120-5-763914

印刷・製本 八紘社印刷有限会社

©日本テーラワーダ仏教協会

